魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

Vergil

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～運に見放された転生者～

【Ｎコード】
Ｎ３４８２Ｚ

【作者名】
Ｖｅｒｇｉｌ

【あらすじ】
まあ、死んで転生した。何処でもあるような話だ。
だがな、あんな死に方あるのか。神はどれだけ俺が嫌いなんだ！！
折角。折角出来たのに……色々と運に見放された不幸な転生者の物語です。

プロローグ（前書き）

コメディ、ギャグに初挑戦です。

こういう笑系統のを書いてみたくなりまして。やってしまいました。

デビルメイクライは、技などで出てきます。主に主人公の。

プロローグ

俺は棗涼介。うん問題無い。
年齢は１８歳であってる。
性別は男……うん問題なし。
此処までは良い、此処までは……
次はとても重要、俺は死んで違う世界に転生した転生者らしい（？）
しかも赤ちゃんからだ。

なんでや、なんでこんな事になったんだ。好きな女の子に告白して彼女も出来て、リア充の生活を送り始めて、なんで！　なんでや。

なんでリア充になって１５分後に死ななあかんねん俺は、世の中はそんなにリア充が嫌いなのか？　そうなんだろう。

だからリア充になって、幸せ絶頂期の俺を死に陥れたんだろう。そうなんだよな。

ならなんで俺だけを死なせた。他にもリア充の奴らは居るだろう？
　なんで俺なんだよ。

折角彼女が出来てリア充になれたのに、リア充を満喫したかったのに、なんでや。初リア充になって１５分後に死ぬって、もうギャグやん。ギャグ以外の何者でもないやん。

何で爆発して死ななあかんねん。リアル、リア充爆発じゃないか！！

転生した直後は相当荒れた記憶がある。

しかーーーーーし！！！！！　此処が魔法少女リリカルなのはの世界と知って、テンションハイ！！！！！

なんだが、その事実を知ったのは俺が小学四年生の頃。丁度４年生の頃に海鳴市って所に引っ越してきたんだ。

その名前を聞いて此処が魔法少女リリカルなのはの世界って知ったんだ。その時クラスは違ったが、他のクラスになのは達がいるのを発見したんだが、不思議な事にアリシアだと思われる人物が居た。

更に見たことの無いツンツンヘアーの黒髪でそこそこ格好いい男の子も混ざって居た。背はなのは達より頭一つ分位高いかな、まあ俺ほどじゃないけど。

そんな事よりも俺は目が点になった。それと同時に、この時点でＰ・Ｔ事件も終わっていて、闇の書事件も終わっている事を物語っていた。しかも二つともハッピーエンドで終わった可能性がある。

あの男の子は原作には居なかった。多分俺というイレギュラーが現れたことにより起こった小さな歪みかもしれないし転生者という可能性も捨てきれないがもうどうでもよかった。

当然の事だがこの時点でやる気が失せた。人生に落胆した。

だけど、神は俺を見捨てて居なかった。

俺が小学五年生の時、デバイスを手に入れた。普通なら手に入れた瞬間テンションがｈｉｇｈになるんだが、なれなかった。

だって、山奥の洞窟だ。しかも、此処まで来るのに死ぬような思いもした。更に目の前には見たことのある女の子が俺にデバイスを手渡した。

こうしてしまった経緯が、家族でピクニックに行く。山の探検に出て。遭難。

不幸だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！　と全力で叫ぼうかと思った時に、目の前から大きな毛むくじゃらの動物が現れた。

全長は３ｍ位で四足歩行で、全身が茶色の毛で覆われている。

手足には鋭い爪。あれで引っ掻かれたら即死間違いなし。

鋭い牙に強靭な顎。あの顎に噛まれたら俺の二度目の人生終了を告げましたになる。

此処まで言えばなんとなく想像は着くと思うが、クマだ。しかもクマの視線が俺を捉えて動こうとしない。とても怖い、小便漏らしそう。脱糞しそうだよぅ。

いくら精神年齢が２０を超えていても小学五年生の肉体でクマに勝てない。転生する前でも勝てる要素は……無し、一個もないよぉぉぉおおお！！

俺とクマまでの距離は大体５ｍ弱しかない。

さあどうする俺？　まさにｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ．　俺が思案している間にもクマが近づいてくる。

さあどうする俺？！　回れ右してダッシュか？　それとも死んだふりか？　どっちが良いんだ！！

選択の時だ。どっちがバッドエンドルートなんだ？　逃げるか、死んだふりか。どっちが良いんだ。

それとも戦闘……そのルート死亡フラグが半端じゃないんですけど。ダメだな。

もうヤバイ。こうなったら・・・・・

……死んだふり。君に決めた！！

俺はその場で倒れて死んだフリをした。さあ、クマよ俺をスルーしろ。

コレで万事解決だと良かったんだが、首元の襟をクマが噛んで俺を持ち上げた。その瞬間、俺は恐怖のあまり失禁して気絶した。カッ

コよく言えばブラックアウトと言える。

しかし、直ぐに意識を取り戻した。側頭部に何か固いものがぶつかった様な痛みでだ。それは運ばれている最中に俺の後頭部が木にぶつかった。その痛みで意識が覚醒した。

ああ、俺の二度目の人生にも終止符が打たれたな、せめて原作キャラとは一度で良いから話をしてみたかったな。悲哀感を全身から放出しながらクマに連れ去られていった俺。

そして、洞窟の奥深くに連れていかれたその瞬間、俺は驚愕した。

だって俺の目の前に女の子が居た。しかも見たことがある……高町なのは？　違う。目の色が違う。

するとクマがその女の子の目の前に俺を下ろすと、何処かに消えていった。

彼女はマテリアルズの一人。星光の殲滅者（シュテル・ザ・デストラクター）。ということはリインフォースが生きている可能性は高いな。

そんな事を一瞬のうちに考えていると、彼女が手を差し伸べてくる。その手には、日本刀の形を型取った白銀のネックレスがあった。

俺はそれを手を伸ばして受け取った。彼女は優しい微笑みを見せた。

心臓が高鳴る。ドクンドクンという音がハッキリ聞こえる。心拍数もハネ上がり、顔が赤くなっていっているのが手に取るように分かる。

相手にこの心臓の音が聞こえてないか凄く心配だ。聞こえてたら滅茶苦茶恥ずかしいぞ。

俺は顔をそむけて、彼女に真っ赤になった顔が見られないようにした。丁度その視線の先に彼女の足元が見えた。しかも、ふらついていた。

危ない、俺はそう叫んだ時には体が動いて彼女の体を俺の体で受け止めていた。まだ発育途中のお胸さんが俺の胸板にむにゅうってなった……ｏｈ　ｙｅｓ！！！！！

だが直ぐ彼女の異変に気が付いた。息が荒く、呼吸が激しい。おでこに手を当ててみると熱いし、しかも頬が赤く火照っている……

これってもしかして……

……発情期！？　マジで、ヤバイじゃん。今から俺に襲えと言いたいのか？　上等！！　襲いまくってやるぜって何を言っているんだ俺は。そんなわけねえじゃん。

俺は彼女をおんぶして、洞窟から抜け出した。俺今、現在進行形で絶賛遭難中、早く父さんと母さんを見つけないと。この子の為でもあるけど、一番は俺の為に。

遭難中の俺は何とか父さんと母さんを見つけて、この子を発見した事情を話した。（クマとの死闘？　は口にしなかった。）親が居ないことやその他もろもろ。
するとさ、俺の予想通り……家の子になった。養子に取ったんだけどね。

ああ、俺の平穏の日々が崩れたかもしれないな。

何でこうなった。

それから約一週間が経ったある日、俺は家でつまらんＴＶ番組を見ていた。

ガシャン！　という物音が二階から聞こえた。

「おいおい、マジかよ。こんな時間帯から幽霊が出たとかいうなよ、俺チキンだから幽霊とか全くダメなんだよな。ああ、幽霊とかマジで勘弁してくれよ。小便漏らしそうだよ。」

メッチャ棒読み。

「ああ、怖いよ。ちびるよ～。」

棒読み。

「父さ～ん。母さ～ん。早く帰ってきてよ。」

ガチャンっとリビングの扉が開く音が聞こえた。首を後ろに回して見ると……美少女だと？　美少女の幽霊だと。キャッホーウ！！美！　少！　女！　イエーイ

御ふざけは此処までにしておこう。

「もう、大丈夫なのか？」

「お陰様で、大丈夫です。」

凛とした透き通るような綺麗な声。

「そうか、それは良かった。」

「……」

「……」

会話が続かん。ちょいっとばかり気まずい空気だな。

きゅるるる～～～っという可愛い音が聞こえた。しかも、彼女の方からだ。

もう一度後ろを振り向くと、全身をプルプル震わせていて、耳まで真っ赤になった顔を下に向けていて、両手でお腹を押さえていた。

正直に言おう。メッチャクチャ可愛い。お兄さんの心臓鷲掴みにされちゃったよ。

まるで、小動物を見ているような感覚だ。撫でたい、愛でたい、ペロペロしたい、お持ち帰りぃぃぃ！！！！

ハッ！！　危ない危ない、もう少しで理性が崩壊するところだった。何とか踏みとどまった――――――パンツ一丁で……アウトォォォ！

俺完全にスリーアウトチェンジィィ！！

ヤバシ、このままだと。変態という名の紳士から変態という名の変態に成り下がってしまう。なんとか戦況を打破しなくては……気のせいか？　あの子から熱烈な視線を感じるのだが？　視線を向けてみた。

顔を両手で覆っている。うん大丈夫――――

「なわけあるかぁぁぁ！！」

ビクッと体を震わせたのが伝わってくるが、関係ねぇ。ガン見じゃん、メッチャガン見じゃん。両手で覆っているのに関わらず、大きな隙間があるじゃん。指と指の間の隙間空きすぎじゃんか！！　意味ねえじゃんかよぉぉ。

するとまた、きゅるるるる～っという音が聞こえた。

「ハハハハハハ！！」

俺はもう腹を抱えて爆笑するしかない。ああもう可愛い。

必死にお腹の虫の音を隠そうと顔を左右に震わせる。何この可愛い生き物は？　ぐへへへへお兄ちゃんが美味しく食べてあげまちゅよ。

台所に行き、包丁を取り出した。

「何が食べたい。」

包丁を片手に包丁に聞いてみる。

「……」

返事が無い。只の包丁のようだ。

変な空気が流れる。Ｏｈツッコミ無か、そうかそうか。なら、ツッコミをしてくれるまで俺はボケるぞ。それでも良いのか、美少女。

「な、なんでやねん？」

疑問文＋可愛く首を傾げる＝グハッ！！。

「グハ！！」

口から大量の血を吐き出して倒れるイケメン。駆け足で俺の傍まで来てくれる美少女、最後の俺を看取ってくれるのか。それはありがたい。

左手で俺の後頭部に手を差し入れて、頭を起こしてくれる。

目には涙を溜めている。そうか、こんな俺が死ぬことを悲しんでくれるのか。

「……」

何を言ってるんだ。

「はよ、飯作れ。」

ハッキリと聞こえた。

「死にかけの俺にそれは無いっしょ。」

我が生涯に一片の悔い無し。ガクッ。

それから、数年後。俺は中二になった。

これで、いくら厨二発言しても大丈ブイ!!!　一応俺はなのは達が通う中学と一緒だ。しかし、あの美少女は違う中学に通ってもらうことになった。

その時に猛反発を喰らったが、高校は一緒の所を通うという事で決着はついた。

後は此奴の学力なんだが、ハッキリ言おうか。学校行く必要なくね！　それが俺の回答だ。

頭良過ぎ、適当に中学レベルの問題（まだ、俺が四年生の頃）出してみたんだが、全問正解。試しに高校レベルの問題も出したが、殆ど全問正解。

そのままの勢いで大学の問題集を買って、試したところ7割以上はあってた。モーマンタイ。

そして、名前の方だが、父さんと母さんが斬新すぐる名前を出せいで三日三晩もかかってしまった。

父さんは、来栖星（星と書いてスターと読むらしい。）どこぞの「はがない」に出てくるペガサスさんだとツッコミたくなったが、我慢我慢。

母さん、これは流石にツッコまずには居れなかったよ、来栖流星と書いて（スターダストと読むらしい。）アウトォォォオオ！！

それ完全にアウトォォォオ！！

それで、俺の出した案で妥協してくれた。いや、マジで良かった。

来栖星香（くるすせいか）と読む。正直に言って、これが一番妥当でしょう。上二つは父さんと母さんが出した案でも比較的にマシな方だ。あれでも。

あ、俺？　今の俺の名前はメッチャ斬新すぐる――――――――――父さん母さん、この恨み死んでも許さないからな。

来栖一馬。何となく予想は付くと思うけど、これ「かずま」って読むんじゃなくて……「ユニコーン」って読むんだ。

穴があるなら穴に入りたい。いっそ殺してくれ。

プロローグ（後書き）

ギャグ、コメディを書く上でこうした方が良いというのがありましたら、ご教授お願いします。

ギャグ、コメディ系統は不得手ですので、よろしくお願いします。

第二話　クラス（前書き）

基本的に一話一話短いです。

第二話　クラス

新学期。

学校に着いてすぐに掲示板にダッシュ。今日から中学二年生、新クラスの仲間たちを拝見しにいかなければならない。

ある意味、学校の中で一位。二位を争うイベントだ。

まあ、拝見って言っても組を確認するだけだ。何故って？　そりゃ学校でも居眠りｏｒ保健室でサボッテばかりの常習犯の俺にはクラスに誰が居ようと関係ない。

誰にも俺のジャスティスに触れることは出来ない。

という事で、新しいクラスに行きますか――――――――主に寝る為に……

その時、彼はシッカリと確認していないのが仇となった。

なぜなら、そのクラスには。

高町なのは。

フェイト＝テスタロッサ。

アリシア＝テスタロッサ。

八神はやて。

アリサ＝バニングス。

月村すずか。

の名前があることに、気づいていなかった。彼がある意味一番絡みたくて、絡みたくない者の名前が全員揃っていることに……。

何時もの俺なら、なのは達＋イレギュラーのクラスを確認していた筈なのに、今となって悔やまれる。確認しなかった事に。マジでミスったわマジで。

イレギュラーの存在。

風間恭仁、彼の名前もあった。

俺のクラスは1組。これで、8年連続1クラスだ。

「俺の席は……あそこか。」

早速カバンを枕代わりにして、

「お休み。」

寝た。その速さにのび太もビックリ。正にのび太に匹敵するほどの速度であった。

一度だけ、なのは達の内、なのはとバーニングとはやてと一緒にな

った事がある。それは去年の話だ。
なのはとバーニングがメッチャ絡んでウザ可愛かった。くぎゅぅ～の声はツボに入る、ゆかり姫の声も良い。

いっつも居眠りしてくる俺に、なのはとバーニングが突っかかってくる。なのはの命令には直ぐに従います。なぜか？　怖いからだ。
去年、なのはを無視し続けたら何処からかクナイが飛んできて俺の額に刺さった。その次の瞬間に、強烈な殺気が俺だけに放たれた。
あんな殺気を浴びたのは初めてだ。死を覚悟したよ、「俺のなのはに迷惑をかけるな！！！！！」っていうシスコンバリバリの思念がハッキリ聞こえたからな。おお、怖い怖い。

バーニングとは、何時も喧嘩だな。

何時殴り合いに発展してもおかしくなかった。なりそうな所で、隣のクラスからバーニングの嫁（？）が飛んできて、止めに入ってくれた。

まあ、なんでバーニングが俺に突っかかる理由は分かっているけど、テストでも負けるのは嫌なんでな。こんなんでも、一応俺は全教科毎回満点で、校内一位で常に二位にバーニングが居る状況だからな。
ｈａｈａｈａｈａｈａ．

はやてとは、話が合うから、彼奴となら同じクラスでも良いかな。

何の話って、そりゃあはやてと言えば……おっぱいしか無いっしょ。
はやてこそおっぱいの聖書だ。
あやつ、此処に通う女子全員のバストのサイズを網羅してやがった。
さいっこうにｃｒａｚｙだ。

今年ぐらいは最高の中学校生活が送れますように……。

その願いも儚く散っていた。しかも、魔導師組揃っているという最悪のクラスで……。

さあ、今日の帰りに翠屋に寄って帰るか。

ＨＲが終わる。１０分間の休憩時間。

誰かが俺を揺すっている……誰だ？　……なんでなのはが居る？？？？　それより、早く起きなければ殺されてしまう。うん？　他にも沢山の気配を感じるぞ。

目を開けて周りを見渡すと。

Ｏｈ！！　なのは達勢ぞろいで俺の席に集まっていやがる。何て嫌がらせだ！！

ｇｏｏｄ－ｂｙ俺の中学二年生生活。

「何、俺の中学二年生生活が終わりを告げたっていう顔をしてるのよ。」

凄いな、俺の心を読むなんて。

「今、私の事。バカにしたでしょう？」

「ソンナコトアリマセンヨ。バーニング。」

「だから、バニングス！！　いい加減名前ぐらい覚えなさいよ。」

「無理だ。」

「何で、即答なのよ！！」

プンプンっと怒りを露わにしている。カルシウムとれ、または牛乳飲めよ。

「まあまあ、アリサちゃん。落ち着いてよ。」

そこで、バーニングの嫁（俺が勝手に決めつけている）がバーニングを宥めている。そのお陰か少しは興奮が落ち着いたようだ……流石、嫁（？）

「だから、私はアリサちゃんの嫁じゃないってば。」

スマンスマン、知らぬ間に俺の思考が漏れていたようだ。

「一馬（ユニコーン）君のせいで、私に同性愛者っていう噂が流れてるんだからね。」

「頼むから、その名前で呼ばないでくれ。一馬（ユニコーン）だなんて、我が生涯の恥だ。」

バーニングが嫌な笑みを浮かべやがった。

「ねえ、一馬（ユニコーン）。」

「グハッ！！」

吐血！！

「一馬（ユニコーン）ってば」

甘えるような甘い声で名前を呼びやがった。

「ゴパッ！！！！！！」

お口から血がドーン！！　死ぬ。頼むからその名前で呼ばないでくれ。

「ユ・ニ・コ・ー・ン」

「ンゴパ！！！！！！

「私たちの入る隙が無いね。」

「にゃははは。」

苦笑いをするなのは。

「はやて、この三人っていつもこうなの？」

「そうやで、アリシアちゃん。」

「一馬（ユニコーン）って面白いね。」

一馬（ユニコーン）には、効果は抜群だ。

「くっそ、誰だか知らねえが。俺のなのは達と仲良くしやがって、コロス。」

風間恭仁が、一馬（ユニコーン）の方を見ながらドスグロイオーラを放ちながらブツブツとつぶやいていた。

第二話　クラス（後書き）

こんな感じで、ほのぼのと行きます。

戦闘は極力少なめで行きます。

来栖星香の登場を楽しみにしている方々、もう少しお待ちください。

第三話　自己紹介（前書き）

更新です。

当然の事ですが、短いです。

第三話　自己紹介

休憩時間も次の授業が始まった。

まだ、新しいクラスになったばかりだから、授業といった授業はしない。一人一人自己紹介をするようだ。

あ～ダリィ～。眠くても、隣になのはという存在が居る為に眠れない。

どうしてこうなるの……

「それじゃあ、自己紹介をする上で、自分の名前と趣味・特技。そして、将来の夢を語ってもらいましょうか。」

教壇に立っている黒髪の美人先生が言っている。概婚者である。

うへぇ～嫌だな。面倒臭いから寝る……出来るわけねえよ。だって、隣になのはだぜ。絶対にシスコン王の攻撃と殺気が飛んでくるって、最悪だ。

珍しく俺は起きている。

着々と自己紹介が進んでいく。先に言っておくが、何でか知らんがこのクラスだけ席順が好きなようにして良いらしい。

まあ、俺は一番左端の一番後ろだ。良い感じに太陽の日が当たって最高の居眠り場所なのに、隣になのは。前にバーニング、右斜め前にすずか。

いろんな意味で楽しくなりそうだ。俺は最悪だがな。

他のメンツの席は、なのはの隣がフェイトに続いてアリシアといった感じだ。

バーニングの前がはやてだ。そして、他のクラスの奴らだ。

風間恭仁は一番右端の一番前だ。俺の席とは完全な真逆だ。

そいで、自己紹介だが右から始めやがった。俺がオオトリじゃねえか。

何が恥ずかしくて来栖一馬（ユニコーン）ですって自己紹介しなくちゃいけねぇんだ。ああ、マジで泣けてくるぜ。

お、風間恭仁が教卓の前に立った。彼奴絶対にクラスに一人は居そうなナルシストそのまんまだな。

実際顔は良いだろうな。男の俺から見てもカッコイイしな……ジャニーズ事務所にでも入ってろバカ野郎が！！！！！。

「風間恭仁です。」

「趣味・特技はスポーツ全般で、大抵何でも出来る。俺に出来ないことは無い。」

おえぇぇぇぇ～～～！！

ウィンクしやがった。

ああ、俺から言わしたら相当痛いぞ。まあ、今の紹介だけで目をハートマークにしている女子どもは色々と人生のやり直しをお勧めするよ。

さて、俺はなのは達の表情を確認してみるとしよう。どんな表情をしているか楽しみだ。

まずは隣の魔王様なのは。

うっわ～汚物・糞を見るような視線で見てるよ。

フェイトは……視線で人を殺せそうなんですが?!　恐いですね。

アリシアは、エチケット袋!!!!!　オブロロロロロロっていう音を出しながら吐いてるぅぅぅぅ。

はやてとバーニング、すずかのよく表情後ろ姿で分る。絶対に負の感情で見てるよ、彼奴嫌われるのか?まあ、俺には関係ないか。

「将来の夢は、まあこの俺のイケメンフェイスを生かして色々なことをやりたいな。例えば世界一イケメンなアクションスターになっても良いし、この美声を生かして歌手でも良いや。」

ナルシ発言が嵐の様に炸裂しやがった。誰か止めに入れ、そして女子!!　なに目ん玉キラキラ星させてやがる。

だれか、止めろよ。なのは達も耳を塞いでゲッソリしてるぞ。アリシアなんてまた吐いてるぞ……計十回ほど。

……１０分後、やっと終わりを告げた。

はい決定。俺の中でコイツは相当ウザい奴だと認定されました。はい拍手、ぱちぱちぱちぱち～～

脳内で俺の分身たちがスタンディングオベーション。

初めてだ、お互いに一言も話を交わさずに俺がウザい奴に認定するなんて、奴相当やるようだな。

その後、彼奴は俺に対して強烈な殺気を向けてきやがった。俺が何をした、只滅茶苦茶ウザい野郎に認定しただけだろうになんでそんな事で、殺気を向けられなきゃならんのだ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいき。

アリシア＝テスタロッサの順番になった。露骨に風間を遠回りするように、一旦俺の列まで来て教卓の前に出た。

「アリシアちゃん、恥ずかしがらずに俺の傍を通ればいいのに。」

あんなセリフを言う奴がマジで存在したんだな。今の言葉を聞いたアリシアが、無表情になった。今の言葉はキツイな、男の俺でも吐きたくなったわ。マジで。

「アリシア＝テスタロッサです。私はあそこに座っているフェイトの双子に姉です！！」

うん、元気一杯の子はお兄さん大好きですよ。

「え～っとね。趣味・特技はね。運動する事と運動！！」

君はアホな子決定ね。

「将来の夢はね、まだ決まってないけど。楽しく過ごせたらそれでいい。」

その意見には俺も賛成だ。君はアホな子だけど、話が合いそうだ。

君はアホ犬で決定だ。

それから、モブキャラの自己紹介が進んでいきフェイトの番になった。

さて、なのはの嫁（？）はどのような自己紹介をしてくれるのか？

思えばさ、結構楽しんで無いか俺？　気のせいか。

こやつも、アホ犬と同じように風間恭仁の事を遠まわしに浮かしながら教卓の前に立つ。そして、また彼奴がウザったいキザなセリフを言っていたが、彼奴の言葉に一々耳を傾けていたらバカになる。

「フェイト＝テスタロッサです。」

うん、落ち着いた物腰。流石執務官。

「趣味・特技は……家事（火事）です。後は、走るのが速いです。」

うん？

「よろしくお願いします。」

家事が火事って聞こえたのは俺の気のせいか、気のせいだよな。そうだよな、俺の気のせいに決まっている。

「あっ？！　夢はまだ決まってませんが、強くなりたいです。」

こうして、フェイトの自己紹介も終わった。強くなりたい？　夫（？）のなのはを負かせる位にか？　そりゃあ無理だろう。彼奴は魔王だからなｈａｈａｈａｈａｈａ！！！！！　何か隣からおっそろしい視線を感じるのですが……

（後でオ・シ・オ・キ・ね♪）

お口がそのように動いてました。Ｓｈｉｔ．ミスったか、俺の思考が読まれるなんて。しかもあのなのはに読まれるなんて、屈辱だ。

だが実際なのはは、「後でお話ししようね♪」っという感じで、親しみをもった感情を込めていたのだが一馬（ユニコーン）のなのはに対しする先入観の為か、そういう風に感じていた。

そいで、またモブキャラの自己紹介が進み。月村すずかの番に回った。

「お！！　愛しのマイエンジェル！！」

すいませ～ん。誰か彼を精神科に連れて行ってください。脳が腐ってますよ、日本の汚点が此処に存在しています。誰か彼を暗殺してください。それが世界平和につながる第一歩ですよ、誰か彼を抹消してください。

「あの、先生。」

「何でしょうか？　月村さん。」

「具合が悪いので、保健室に行きます。」

「そうですね。顔が真っ青ですし、直ぐに行ってください。」

「はい、先生。ありがとうございます。」

真っ青って言うかさ、死人みたいな顔色になってますけど？　ドンマイ。

まあ、彼奴が絡まないわけないよな。

髪を掻き上げながら颯爽とすずかのもとに行く。正直に言ってバリキモス。

人間として終わってやがる。

うわぁ～露骨に嫌な顔をしてるよ。流石に可愛そうだから助け舟出してやるか。

「先生。」

「どうしましたか？　一馬君（ユニコーン）。」

「ゴパ！！！！！」

と・け・つ！！！　だが、之で。

「先生、吐血したので保健室行っていいですか？」

「吐血したんですか？」

「はい。」

よし、これで保健室に

「ダメです。」

「はい？」

「先生、今なんて言いました？」

「あら、一馬君（ユニコーン）は耳が悪いのでしょうか？」

「グハ！！！！！」

だから、その名前で呼ばないでくれ。と、吐血が。

「そんな、リアルな芝居しなくていいですよ？」

「いや、先生。これはし」

「しなくていいですよ。」

「いや、だから先生」

「しなくていいですよ。」

「いｙ」

「黙れ、豚野郎！！！！！」

「はい。」

何このクラス。冥王様がいらっしゃるよ、談笑していた生徒が一斉に黙り込んだよ。普通さ生徒に向けて豚野郎は無いんじゃない？せめてウンコクズでしょう。

こんな感じでグダグダで、時間が過ぎていき。俺まで回らずに自己紹介は終わった。

ああ、俺の名前が知れ渡ってしまった。一馬（ユニコーン）は辛いよ。

「「あれ、うち／私の自己紹介は？」」

時間が足りず回らなかった。

第三話　自己紹介（後書き）

ウザいですね～風間恭仁♪

第四話　ｍｉｓｓｉｏｎ？捕まるな　（前書き）

更新。

一馬（ユニコーン）が変態になった。

第四話　ｍｉｓｓｉｏｎ？捕まるな

今日という一日の退屈な学校が終わった。

カバンを持って帰ろうと立ち上がった時。肩をガってされました。

怖いので少しずつ顔を後ろに持って行きました。

「あの～魔王様（なのは）。私のような下郎に何かご用でしょうか？」

「もぉ～なんで自分を卑下するような言い方するの？」

それはね、あなた様が怖いからであります。最近、自分のキャラが分らなくなってきました。

「何で、勝手に帰ろうとするの。お話しようって約束したのに。」

「ｗｈａｔ？　Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ」

「何でそんな事言うの？」

「Ｗｈｙ，　Ｉ　ａｓｋ　ｔｈａｔ　ｏｂｖｉｏｕｓ？」

「それは。」

「それは？」

「なのはが『可愛いからだ』！？！？！？！？」

誰だ?!　何てこと言いやがる。後ろを振り向くと犯人が俺の後ろでしゃがんでしてやったりって顔をしてやがった。

なのはは、顔を真っ赤にしているがそんな事を気にしている俺ではない。

「おいはやて。どういうつもりだ?　アァァン!」

「にしししし。」

何、悪巧み成功したっていう顔をしてんだよ。この後に俺に降りかかってくる不幸を知っているのか!

「一馬(ユニコーン)。どうしてなのはには、可愛いって言うのに。私の場合はバーニングって言うのかしらね。一馬(ユニコーン)?」

ほらね、来たでしょ。不幸の権化が――――――――――――どっかに糖分王国への入り口が……

吐血している暇なんかねえぇぇぇ!!　怖いよ。炎王が俺の両肩をガってしてきたよ。

「どうしてかしれねぇ?」

「ハハハハハ。どうしてだろうな?」

「アハハハハハ。」

バーニングの滅茶苦茶怖い笑い声に、話をしていたクラスメイトが一斉に静まり返って顔を青くしている。ナイスコンビネーションな

のか？

そして俺とバーニングは最恐のバンドを組んだ。Ｂａｄ　ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ．（後のＢ、ｚ）

「ハハハハハハ。」

頬を引き攣らせた逃れられない苦笑い。

「「アハハハハハハハ。」」

二人の笑がとうとう合わさる時、一馬（ユニコーン）の逃走劇が始まる。

回れ右からの、

「Ｂダッシュ！！」

「逃がすかぁぁぁぁぁ！！！」

物凄い形相でバーニングが追いかけてくる。赤鬼も青鬼も尻尾を巻いて逃げる勢いだ。

「はやてぇぇぇぇぇぇぇ！！　てんめぇぇぇぇぇ！！　明日覚悟しとけえぇぇぇぇぇ！！！！！」

「ほんじゃ、頑張ってな。」

メッチャ他人事何ですがねはやてさん。明日ハヤテ、オモチカエリ、タベル。マジで覚悟しとけよ。

「ほわちゃあぁぁぁ！！」

「うわっ！！」

マーシャルアーツキックしてきやがった。ちょっと掠ったぞ。どんだけ武術レベルが高いんだ、バーニングは。

捕まったら殺されるな俺。ガチのリアル鬼ごっこやん。

一応バーニングを巻くことは出来たが、易々と学校を出ることは出来ないだろうな。アイツの勘は恐ろしいほどに当たるからな。それに捜索レベルも高いし、さて何処に隠れようか？　今隠れているところも何時かは絶対にばれるが、検討はなかなかつかないだろうな。凄く意外なところだからな。

現在、俺が隠れているところは、四階の女子トイレの一番奥の個室だ。何か新年度早々やらかした気がするが、気にしたら負けなんだろう。

普通なら女子禁制の男子トイレに隠れるんだが、彼奴の事だ。直ぐにバレる。ならその裏をかいて男子禁制の女子トイレに身を潜める。これこそかくれんぼの鉄則。

女子更衣室でもＯＫだ。

さて、それはそうとどうやって出ようか？　今この女子トイレに女子が集団で入ってきて出るに出れない状況にある。しかも、彼女ら

は先輩だ。

此処で出たら変態という名のレッテルが張られてしまい、学校全土に知れ渡ってしまう。ましてや、家族にも知られてしまう。それだけは避けなければならない。

特に星香にばれたら、ｓｅａｒｃｈ&ｄｅａｔｈという状況になってしまう。まさしくｄｅａｄ　ｏｒ　ｄｅａｔｈだ。

此処から脱出する為の選択肢は一応何種類かある。

一つ、変態という名のレッテルを張られる覚悟で出る。

一つ、全員居なくなるまで耐えきる。

一つ、女装をして逃げる。これはダメだな、男としての大切な何かが失ってしまいそうだ。それか、何かに目覚めてしまうかもしれん。

いや、もう一つある。それは――――――――――パンツを被って顔を隠す……そうだ、これが一番良い。これなら顔をばれなくて済む。よし、思い立ったが吉日だ。

しかし、誰のパンツを被ろうか。流石に自分のパンツを被るのは辛いな。出来れば女子のパンツがあれば一番良いんだけどな。そんな都合の良い話あるわけないか。

自分のカバンのチャックを開けて探ってみた。

結果――――――――マジでパンツとブラジャーが入ってた。色はピンクで、Tバック。ブラジャーも色はピンクで生地が薄い。もう言わんでも分る、これは星香のパンツとブラジャーだ。何で入ってるんだ？　俺は入れた記憶はないハズ――――――――多分。

記憶を探ってみようか。

今日の朝

「ユー君。起きてください。朝ですよ。」

星香が何時もの日課。俺の部屋に来て俺を起こすという至福のタイム。

星香は俺の事を「ユー君」って呼んでくれる。一馬（ユニコーン）って呼ばれるよりマシだが、「ユー君」もキツイ。

なぜか？　そりゃあ、「ユー」の後に「ノ」をつけたら淫獣の名前になってしまからだ。それでも一馬（ユニコーン）って呼ばれるよりマシだ。

「むにゅあ～後、五分。」

寝返りをうつ俺。当然だが狸寝入りをしている。

「分りました。」

あれ、なんか聞き分けが良いな？　どうしてだ。

殺気！！！！！

俺は転がるようにして、ベッドから逃げて直ぐにドスッ！　ていう音が聞こえた。確認して見るとね、俺の頭のあった位置に国語辞典と漢字辞典の二つの角が突き刺さっていたよ。枕には大穴が空いてた。

凄いね。国語辞典と漢字辞典の角って枕にも穴を空けることが出来るんだ……

「あの～どうやったら、辞書の角が枕を突き破っているのですか？　星香さん。」

「どうしてでしょうかね？」

笑っているが目が全く笑っていない。恐いです。只、逆らってはいけないと本能が告げている。

「あの～どうして、広辞苑なんて凶器を掲げているのでしょうか？」

「簡単ですよ。」

「教えてくれるとありがたいのですが。」

「ユー君を、殺して私だけの者にする為です。」

ヤンデレ化していた。誰か助けて、俺に安息の地を与えてくれ。

それからの記憶が無いんだな実際。気が付いたら制服姿に着替えていて、カバンも準備されていて、リビングのテーブルに座らされていたな。何事も無かったように朝食を食べて、学校に来たな。

星香。俺の記憶が無い時にカバンに入れやがったな。

さて、今の俺の状況を整理してみようか。

先輩方の女子トイレの一番奥の個室に入っている。

片手に女子のパンツとブラジャー片手で皺がつくほどしっかりと握りしめている。

それを被って此処から逃走しようと考えている。

変態という名の変態だな。だが、決して俺は変態ではない。紳士だ。

だが、この状況を誰かに見られたら社会的に終わるね俺。

下手すりゃ警察にお世話になっちゃうぜ……ヤバイ。色々と前言撤回、女子トイレに籠城しようそれが一番良い。

それから、１時間後。やっとの思いで学校から出ることが出来た。

運良くあの後、直ぐに女子たちがトイレを出た。その隙に誰にもバレることなく俺も脱出して、一応学校全域を回った。

バーニングは諦めて帰ったと分かった。

今は校門を出て直ぐの所に俺は居る。正座の状態で……

何で正座をさせられているのか？　簡単だ、バーニングが校門でＳＰに見張ってもらっていた。俺が学校を出たのを確認してＳＰが直ぐにバーニングに報告。

その次にＳＰに捕まった直後にバーニングが来る。

そういった流れで、俺は捕まった。両手に超硬合金で出来た手錠をされていて、バーニング様の片手には最高１０万ボルトまで出力が出せれるスタンガンを持っている。

スタンガンがさっきからバチバチ鳴っているのですが？　なんでバーニングはそれを俺に近づけているのですか？　そんなのされたら俺死ぬよ……多分。

「さて、どんな処刑が良いかしらね。」

「１０万ボルトの刑。目に１０万ボルトの刑。それとも全部？」

「それ、死ぬぅぅぅぅぅ！！　俺死んじゃうよ！！」

嫌だ。俺はまだ死にたくないよ、まだヴィヴィオのパンツクンカクンカしてないのに死にたくないよ、食べても無いよ。

「ハッ！！！！」

「汚物は死んだ方が良いようね。」

「嫌だ、止めて、死にたくない。」

「だいじょうぶ。死なない程度で止めるから。」

「それって、死ぬ一歩手前までやるって意味で良いのですか？」

「あら、良く分ったわね。」

目が全く笑っていないですよバーニング様。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！！！」

そこからの記憶が全くない俺は、気が付いたら夜になってた。

第四話　ｍｉｓｓｉｏｎ？捕まるな　（後書き）

一馬（ユニコーン）は、運に見放されていますね。

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その１（前書き）

今回も星香が出るんですが、書いてて星香に萌えました。可愛い。

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その1

新年度始まっての初めての土曜日であり、休日。

休日になるまでの学校生活で、俺はずっと保健室でサボっていた。

でないと、居眠りが出来ない。俺の隣に冥王様がいらっしゃる。

もし、寝ていたらなのはが俺を起こすのに時間がかかり迷惑になってしまう。そこは良いのだが、クナイが飛んできて俺の額にぶっ刺さるんだ。その後に「俺の妹に迷惑をかけるな」っていう思念と人を殺せそうな殺気が飛んでくるんだ。

それにより、痛いっていうか傷口がヒンヤリして起きてしまうんだ。

……何時か小太刀が飛んできて、殺されそうなんですがね……全く笑い事じゃない。

保健室でサボっていてもバーニングがやってきて、マンマミーアになってしまう。

……最近学校で居眠りが出来ない。なえる。

この世にバーニングと冥王様が居る限り、俺に安息の地は無い。断言してもいい。

やっとの事で学校という鳥籠を脱出して、念願の休日イェーイ。

今回こそゆっくり寝るぞ！！　その思いも簡単に砕け散っていた。

前日の夕食時。

「一馬（ユニコーン）。」

母さんが俺の名前を呼んだ。

そういえば母さんの名前を紹介をしていなかったな。

来栖美麗（くるすみれい）って言うんだ。今年で三十後半に入るんだが、顔が結構な童顔な為か二十代前半って言われてもなんら遜色ない母さんだが、頭のネジが何本か吹っ飛んでいる。

実際、遠い親戚送られてきたタワシをウニと勘違いをして、食卓にウニ（タワシ）の姿煮という素晴らしい料理を作ってくださった。

だから、料理は何時も俺が作っている。そこで何時も星香が手伝ってくれているから、助かっている。

それを父さん。来栖麗司（くるすれいじ）は、食べたんだ。タワシを泣きながら、口から血を流しながら食べていた。その時の父さんを見て悪鬼羅刹という言葉が一番最初に浮かんでしまった。それほどの形相で食べていたんだ。

父さんは、バリバリビジネスマンだ。会社の方でも凄く重宝される人材らしい。

「明日から、麗司さんと一か月以上の海外旅行に行ってきますね。」

「うん、わかった……はいいいいいいいい！！！！」

今、なんて言ったんだ。俺の聞き間違いじゃ無ければ、「明日からお父さんと一緒に一か月の海外旅行に行ってくる。」だと

「美麗。何を言っているんだ、明日から一週間だよ。」

「あらあら、そうだったかしら。」

首を傾げながら、頬をに手をやった。そういえば、もう一つ忘れていた。

母さんは重度の天然で、男殺しなんだ。色々と天然なせいで母さんに告白をしてくる男性が後を絶たないんだ。最近は減って来たよ週に五回に減ったよ、え？！　前はどのぐらいだったかって、そりゃあ一日の平均が5回位だったよ。

父さんもその時の気苦労。見ていて可哀想だったよ、母さんはそんなのお構いなしだったからね。告白されたことをいつも家族全員がそろう夕食時に話していたんだよ。

本当に父さんを見ていて、可哀想だったよ。

「そんな事よりも、明日星香と一緒に此処に行ってきなさい。」

そういって、父さんにとあるテーマパークのペアチケットを受け取った。

「「……はい？」」

息がピッタリの俺と星香。

「そういう、事だから明日からよろしく。」

そういって、父さんは母さんをお姫様だっこして二階の夫婦部屋に消えていった。残された俺と星香は呆然としていた。

「……」

すると、突然星香が俺の服の裾を摘まんだ。うん、こういう小動物的な行動が可愛いんだよなコイツハもう。頬を緩みまくった。

「ユー君。私は行ってみたいです。」

そういう風にお願いされると、断れるわけないじゃん。

「了解しました。お姫様。」

「本当ですか!?」

急に顔を近づけて、嬉しそうに聞いてくる。星香の顔が目と鼻の先にある。

年頃の俺には……この距離はヤバイ……心臓が高鳴る。

「あっ！　すいません!!」

顔を真っ赤にしながらバッと離れた。もうちょっと見ておきたかったなっていうのが俺の本心だ。心臓は爆発しそうな程、高鳴ってい

たけど。

「大丈夫だよ。」

平静を装っているが、正直いって色々とヤバイ。顔を近づけた時に、女性独特の甘い香りが鼻孔を擽ったのだ。俺の息子が反応してしまった。

にしても、やっぱり星香は嬉しそうにしている表情は可愛いな。特に顔を赤くしたときなんて、特に可愛い。

もっと、感情を表に出せば良いのに……もったいない。

「なあ、星香。もっと感情を表に出せよ。可愛いんだから、もったいないぞ。元も凄く可愛いんだから。」

「なっ！！！　なななななななななな！！！！！！！」

耳まで真っ赤にして、もの凄い速度で後ずさりをした。面白いな星香は、

「なって言い過ぎ。」

「からかわないでください！！　恥ずかしいじゃないですか！！！！　もう。」

そんな顔をして、怒られても困る。メッチャ可愛い。

「……冗談じゃないのにな。星香が可愛いのは、本当の事だし。」

ピキーン！！　と全身をマネキンのように固まらせた。可愛面白い星香。

「イヤァァァァアアアア！！！！！」

叫びながら、二階に上がって自室に閉じこもったまま、出なくなってしまった。

何度も言うようだが、星香は贔屓目無で可愛い。

もう、風呂には入っているし自室に戻って明日のために寝ることにした。

金を下さないといけないな。

明日は平和に過ごせますように、割とガチで……

第五話　一馬（ユニコーン）の休日その１（後書き）

いやぁ～～星香は可愛いですね。嫁に欲しいぐらいです。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その2（前書き）

更新です。

家を出るまでの、ちょっとした風景を書きました。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その2

とうとう、休日の土曜日。

珍しく目覚まし時計を使用して、６時前に起きた。もう父さんと母さんは荷造りをして、海外旅行に出かけていて、家には居ない。

うん、今日一日は平和に過ごせそうだ。ガチでお願いしますよ、神様。こんなに運に見放された俺にも、今日ぐらいは平和に過ごさせてください。

初めて、朝日の出に向かって座禅を組んで、合掌したよ。効果があるといいな……無かったら、星香が可哀想だ。

自分の部屋から出て、リビングのドアを開けようとした時、中からジューっていう音が聞こえた。

「星香なのか？」

星香にばれない様に小声で呟いた。という事は星香が料理をしている事なのか？　アイツ料理できるのか？　毎回手伝ってもらっているけど、手伝いと料理をするっているのは思っているより全然違うものだからな。特に調味料の量とか、味付けの感覚とか、手伝いだけじゃ分かりづらいからな。

まあ、大丈夫だろう。母さんみたいにタワシをウニと間違えたりしないよな。

俺はアイツの事信用しているからな、邪魔しちゃ悪し……なら、もう少し寝るか。後、小一時間ほど寝るかな。

物音を立てないように自室に戻って、俺はムラムラしていた。

よく、考えたら今から一週間星香と一つ屋根のしたで二人っきりで過ごす事になるじゃん。ヤバイじゃん、俺の理性保かな。無理そうな気がするが、頑張ってみますか。

星香を襲って、嫌われたくないし。何をとっても、星香を傷つけたくないのが一番だしな。

そして、もう一度俺は眠りについた。

「ユー君。起きてください。」

「お願いですから、ユー君。起きてください。」

ユッサユッサっと揺らされる。ああ〜何か気分が良い。気持ち良い。

「でないと、」

でないと何だね星香？

「辞書の角の錆びにしますよ。」

「起きます。起きさせていただきます。」

ベッドからジャンピングして、飛び起きる。辞書の角攻撃はマジで洒落にならんからな。昇天してしまうわ、俺Mじゃないから攻められると弱いの。

「早く、着替えて顔を洗って、歯磨いてくださいね。」

「へいへい。」

そういって、俺の部屋から出ていく星香。

「何かさ、新妻化してきてないか？　俺の気のせいだと良いんだが……それとも、何だろうな？」

タンスからジーパンと白のちょっとした柄の入った服を取り出して、着替えた。寝間着を持って部屋を出て洗濯機に叩きこんだ。

中に星香の下着も入っていた。うん、良いものだな。

無意識に俺は握っていた――――――――星香のパンツとブラジャーを、しかも俺は、それをクンカクンカしていた。故に俺は気づけなかった。

「ゆ、ゆうゆゆゆゆゆっゆ！！　ユー君、何をしているんですか！？！」

俺の変態行為を見られていることに、

「ハッ!?」

俺は今何をしていたんだ。それにこの生温かくて良い香りを出している物はなんだ？　顔に張り付いている布を手に持って確認した。……俺ってばヤラカシタ……アハハハハハ。ヤッバーイ!!

「アノ星香サン、コレハデスネ。魔ガサシタトイウカ、ナントイウカ。」

「ユー君。」

メッチャ怖いです。ハイ。

「ゴメンナサイ。」

その場でジャンピング土下座。膝が割れるかと思った。膝すんごく痛かった。

殴られる覚悟であったが、殴ってくる気配が全く見られない。はて、どういう事だ？　顔を上げて見ると、顔を真っ赤にしている星香の顔を見た。

あっれ～俺が思っていた展開と全く違うのですが、どういう事なんでしょうか？

「言ってくれれば、脱ぎたての下着を渡していたのに。」

星香は何を言っているんだ？　ぶつぶつといった感じで何を言って

いるのか聞き取れないんだが。

俺が不思議そうな表情をしていると、プイって顔を明後日方向に向けた。

「何でもありません。それに、早くしてください。」

「あ、ああ。」

立ち上がった。膝がヒリヒリして痛い。

リビングの椅子に着いて、星香の用意してくれた朝食を食べた。メニューは日本人の代表的な朝食、みそ汁と白米。特にみそ汁は文句なしにうまかった。

食器を洗い片づけて、一旦自分の部屋に戻り身だしなみやその他諸々の準備を完了させた後、戸締りを確認した。

「星香、裏手のドアは閉まっているか？」

「ハイ、今閉めてきたので大丈夫ですよ。ユー君の方こそ、大丈夫ですか？」

一応確認したが、問題なし。

「俺の方は問題なしだ。」

俺の言葉を聞いた星香は早歩きで俺の傍までやって来た。

「じゃあ、早く行きましょう。」

俺の腕を引っ張る星香は、良い笑顔をしていた。

第六話　一馬（ユニコーン）の休日その２（後書き）

次回、遊園地。

日曜日に更新できたらいいな。次回は何時もより多めにする予定です。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その３　（前書き）

活動報告通りに、土曜日に更新しました。

休日はその５まで書く予定です。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その3

家を出て、１０m位歩いた所にバス停があるので、そこまで歩いた。

ここで俺の服装をご紹介しよう。
柄物のTシャツに黒色の上着に、ちょっとしたアクセントにネックレスとブレスレットをしている。ズボンは紺色のジーパンだ。それと、何時もは地味な黒色の眼鏡をかけているが、今日は柄の入ったオシャレな眼鏡をかけているよ。言っておくけどこの眼鏡伊達じゃないよ、きちんと度が入っているよ。自慢じゃないが俺ってそんなに視力良くないからな。
財布はシーパンの後ろポケットにいれてある。
今日のために貯金箱から、５万円ほど取り出してきた。平凡な中二にとっては結構な出費だと思う。でも、他の最近の中学生はリッチだからお財布事情はそこまで分らん。特にバーニングとかすずかとかな……金持ち爆発しろ！！！！！

そんな俺よりも、星香の方が気になるだろう。正直に言って萌えたし、メッチャクチャ可愛い。
こんな可愛い子が嫁だったら、幸せな家庭を築くことが出来そうだ。

星香は、ゴチャゴチャと飾らずに結構シンプルに決めていた。
細身のパンツに、小花柄のワンピースを重ねていた。当然ワンピースの色は白。
片手には大き過ぎず、小さ過ぎないバックを持っていた。何時もは髪型をサイドポニーにしているのだが、今日は髪をおろしていた。

うん、凄く似合っている。それと、同時に俺と星香が一緒に歩いていて、俺は見劣りしていないだろうか？　それが少し心配した。星香と一緒に出掛けるから、結構身だしなみには時間をかけたんだよな。まあ、それは二の次だな。

なんたって今日の一番の目的は……

「星香、今日は楽しめよ。」

「はいっ！！」

元気百倍の返事。これなら、突然現れたアソパソマソに襲われても大丈夫だな。

そう星香が楽しんでくれることが一番なんだからな。バスに乗り、二人掛けの座席に座った。約十分間バスに揺られること、目的の駅に着いた。

貰ったチケットの遊園地の場所が、隣街。ここ海鳴市より少し大きな街だ。

それで、その場所ははやての住んでいる街でもある。よくよく考えてみると、はやてって海鳴市の隣街に住んでいるんだよな。

絶対に見つかりませんように……こういう時に限って見つかる可能性が大きんだよな……特に俺の場合は……何も無いと良いけどな。

見つかったら「不幸だぁぁぁぁぁぁあああ！！！！！」て喉がつぶれるぐらいの大声で叫んでやる。

だから、今回だけは大っ嫌いな神様に神頼みしてやるから、叶えろよ。俺の願いを……なのは達に遭遇しないっていう願いを……もし、見つかったら、俺は修羅になって神様という名のクソジジイをぶっ殺してやるからな覚悟しておけよ。

電車に乗って、また揺られる事３０分弱。目的の駅に着いた。

早く着いてほしくて堪らないのか、星香がダッシュで電車から降りた。その際に、入ってくる人とぶつかりそうになった。星香はすぐに「すいません。」と頭を下げた。

「ユー君。早く来てください。」

「急がなくても、バスの時間には間に合うよ。」

「それでもです。」

「はいはい。」

駅前のバスに乗って、遊園地前のバス亭で降りる予定だ。改札口を抜けて、そのバス停の所まで行った。

うん、ヤッパリ列が出来ていた。その中でも若いカップルが多いな。特に１６才～２０才位までのカップルが多く並んでいた。

当然、中には家族連れの人たちも居た。

その中に俺たちも並んでいる。位置的にいうと、列の半分から前位の位置に居る。確実に座れる位置だ、電車の時は座ることが出来ずに立っていたからな。

「ユー君。今日は楽しみましょうね。」

「当り前だろう。楽しまないと損だしな。」

俺と星香は一緒の事を考えて居たらしく、一緒にクスクスと笑いあった。

流石にこんなに人が行き交うところでは大笑いはしたくは無いし、恥ずかしいからだ。それは星香も同じだろうな。

それにしても、星香の笑った時の笑顔は可愛い。星香が笑った時に結構な数の男が星香を見て、顔を赤くしていやがった。ふふん、良いだろう。

今から星香と一緒に二人だけで、遊園地を回るんだ。俺は勝手に優越感に浸っていた。

そういう俺も、星香の笑顔にやられて真っ赤にしていたのは秘密だぞ。分ったな。

でもさ、そう考えるとな。高町達も可愛いし綺麗なんだよな、バーニングもそうだけど。

偶に思うんだ、俺の周り可愛くて綺麗な女子多くないかってな。今、こんな思考を巡らせるのはあまり良くないし不謹慎かもしれんが、つくづくそう思ってしまうんだよな。

「イタッ」

太ももに鋭い痛みが走った。星香が俺の太腿を抓っていた。

「今、何を考えていたのですか？」

しまったな。俺の思考が表情に出ていたか、仕方ないこうなったら。

「まあ、星香の事を考えて居たよ。」

耳元でボソッと呟いた。流石にこんなセリフを一般人に聞かせたく無い。俺が恥ずかしい。

当然だが、星香は、

「ハゥ～」

顔を真っ赤にしていた。星香もやっぱり場所を弁えている。こんな所では叫んだりはしないが、誰が見ても分かるほどに顔を真っ赤にして俯けていた。

何時もクールビューティーの星香が、こういう風に感情を出すだけでギャップがあって萌える。

バスがやってきた。何時までも顔を真っ赤にして俯いている星香の手首をつかんで、引っ張っていく。

「何時までも、ボーっとしてたら迷惑だろう。」

「あ、そうでした。すいません。」

星香は後ろの方にを向いて、頭を下げた。誰も星香に文句を言った

りせずに、気にしないで良いよってみたいな感じで対応してくれた。
何度も思うけど、ここ等辺に住んでる人達って良い人多過ぎ。

バスに乗って、二人掛けの座席に座った。

俺はずっと、星香の横顔を見ていた。だって、見ていて飽きないんだよ。
さっきから星香の表情が変わっていっているんだ。それが、徐々に遊園地に近づくにつれて、頬を緩んで行っている。更に視線をあっちにキョロキョロ、こっちにキョロキョロさせていていた。何なのこの可愛い小動物は！！！　俺を萌え殺す気ですか？！
星香の嬉しい時の色々な表情を見ることが俺得。

バスに揺られて約１０分。遊園地前に着いて、俺ら二人は金を払って降りた。もちろんお金は俺持ちだよ。

星香の方に視線を移すと、まあそこには予想通りの満面の笑みの星香が居た。

「星香。」

「何でしょうかユー君！！！」

嬉しい気持ちを全く抑えきれていない様子だ。Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ.

ｍｙ　両親。星香はさっきからずっと良い笑顔をしてますよ。

「ｇｏｏｄｊｏｂ！！！！！」

父さんと母さんが居るであろう、方向に腕を伸ばして中指を立てた。マジでｇｏｏｄｊｏｂだ。

すると、突然。腕をグワンッと引っ張られた。一瞬、肩が脱臼するかと思ったぞ今の勢いは……星香が俺の右手を両手で持って、引っ張っていた。

「早く。早く行きましょうユー君。」

そんな純真無垢な瞳で見つめないでくれ、俺には眩しすぎる。俺の両目が某ムスカ大佐みたいに「目が、目がぁぁぁぁあ！！！」てなってしまうぞ。それでも良いのか？

「そんな、急がなくても遊園地は逃げたりしないよ。」

「それでもです。早く早く！！」

「ヘイヘイ。」

息子、娘に急かされるパパの気持ちってこんな感じ何かな？　何か凄く嬉しい？　表現が難しいが、多分嬉しいっていう表現が一番近いだろう。

俺は星香のダッシュに引っ張られてた。フリーパス付のペアチケットを入場門の係員に渡して、遊園地に入ったその瞬間。

「ワアーーーー！！！」

星香が両手を広げて感嘆していた。ここの遊園地はな、最近できたばっかりで、しかも敷地面が某ねずみランドに匹敵するぐらいの広さなんだ。

うん、アホみたいに広いな。これじゃあ、完全制覇できそうにないな。まあ、今日の趣旨は――――――思いっきり楽しむことだ。

さあ、今日は思いっきり楽しむぞ。

第七話　一馬（ユニコーン）の休日その３　（後書き）

次回は遊園地編です。

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４　（前書き）

更新です

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４

星香は早速、パンフレットを広げている。最初はどれに乗ろうか吟味をしているようだ。
目が物凄く真剣。少し近寄りがたい雰囲気を出している。

星香、お前どんだけ真剣なんだよ。もうちょっと楽にしろよ、じゃないと肩が凝るぞ。

気が付けば、俺は額に手を当てていた。仕方ねえな。

「星香、行くぞ。」

「え、あ！　ちょっと！？」

星香の手首を握って、歩き出す。

「星香、こういうのは直感だ。アトラクションの名前でも何でもいい。これだって思ったものに乗ればいいんだ。分かったな。」

コクコクっと頭を縦に振った。

「よし、行くぞ。」

「お、おおお」

今日の星香はノリが良い。いつもこんな事してくれないのに……まあ、いつも通りの星香が一番いいけどね。

「ユー君。私はあれが乗りたいです。」

「マジで言ってるのか。」

「はい。大マジです。」

「ＯＫ．やってやろうじゃねか。」

そういって係員に眼鏡を渡して乗り込んだのは、このテーマパークの一番の絶叫マシーン。その名も「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」生きるか死ぬかだ。

早速、先頭に乗った。こうなったら自棄だ！！　きやがれ！！　…正直言いますと俺、絶叫系は全くダメなんだよね。生きて居れるかな俺。

隣の星香の顔を見てみると、うん、笑顔で何よりだ。俺も男だ、星香の為に命を賭けるか。只の絶叫マスィーン如きだがな――――――アハハハハハハ。オレシンダ。

「ユー君、楽しみましょうね。私すごく楽しみです、良くテーマパークのＣＭが流れた時にこういう絶叫マシーンに一番に乗ってみたかったんです。」

ガタンガタンっと動き出すコースター。しかし、俺には星香が何を言っているのかが耳に入っていなかった。

「だから、ありがとうございますね。」

屈託の無い笑顔、しかし、俺にはそれを見る余裕すらなかった。今の俺は悟りを開きかけて、

「いるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

「きゃあああぁぁぁぁぁぁあああああ！！」

垂直と言っていいほどの落下。死ぬぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！　チキンハートの俺。死ぬぅぅぅぅぅ！！！　隣で、黄色い声で叫んでいる星香の様子を見る暇なんて全く無い。

そして、とうとう「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」と名付ける由来になったポイントまで来た。よし、これで最後だ。これで降りれる。

だが、俺はまたも地獄を見たんだ。

コースターが垂直に昇っていく。しかも、相当な高さだ。何でこんな時に限って頭が冷静になってんだよ！　嫌な事を引っ張り出してしまったじゃねえか。この高さ確か、殺しって書いて５６４ｍって読むんだったよな。それで、頂上まで行ったらそのまま背中向きで落下していくんだよな。グネグネ曲がったり回り捻ったりしながら……ありえねえよ。俺確実に死んだな。

もうありえねえよ、高さ５６４ｍってどうやって作った。責任者読んで来い。

すると、突然。左手に人肌の温もりを感じた。

「ユー君。大丈夫ですよ。私が手を握ってあげますから。」

「せ、星香。」

あんた、男前やぁぁぁぁああ！！　俺よりも男前じゃん。こんなに良い子、なかなか世の中に居らんよ。

手足の震えが止まっていた。

「ね。」

マジで良い子やぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！！！！！！　世界の中心で叫びたい。

突然。ガシャンっという音を立ててコースターが止まった。はて、なんで止まったんだ。まだ、１００m位しか登っていないのにな。

乗っている人たちがガヤガヤし始めた。

『うおあ！！！』

と男達は野太い声を上げた。

『キャアア！！』

と女性たちは短い悲鳴を上げた。誰もいきなりのトップスピードに何も心構えも出来ていなかった。

トップスピードで駆け上がるコースター。
さあ、来るならきやがれってんだ。

眺めが、アホみたいに良いなあ。あ、死んだ曾おじいちゃん今からそっちに行くよ。

曾おじいちゃんがこっちへおいでって、手を振っているのが分かる。

『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！！』

地を砕き、天を裂くような悲鳴が響き渡った。其処からの記憶が全く無い。多分、俺の危険防衛能力が発揮して強制気絶させたんだろう。最後がどうなったか記憶が全く無い。

気づいたら、「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」の前にあるベンチに座っていた。俺の隣には星香が居た。
他のベンチにも、「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」で見かけた人たちがたくさん居た。多分全員が、同じ目にあっただろうな。もう、絶対にあれには乗らないぞ。

「星香。大丈夫か？」

「え、ええ。何とか大丈夫です。」

言葉はちゃんと出していて、しっかりしているな。

「よし、次に行くぞ。」

「行きましょう。次は落ち着いたのが良いです。」

「俺もだ。」

重たい腰を持ち上げて立ち上がった。そして、歩き出す。

俺は常に、星香の歩幅に合わして歩いている。これぞ、紳士の嗜みだ。

「次はあれが良いです。」

そういって、星香が指差したのは、定番中の定番。お化け屋敷だ。

「い、良いぞ。お、おばけなんて、こここの世に、いい、い居るわけ、ななないないないからね。」

「や、止めましょうか？」

「いや、だだ大丈夫だぁぁあ。」

「そうですか。では、」

また、右手に温もりを感じた。

「私が、手を繋いであげます。」

顔を赤くして、恥ずかながらも言ってくれた。そんな事されたら、

逝くしかねえじゃんか。

「良し、逝くぞ。」

「はい、字は違う気がしますが、逝きましょう。」

そうだね、星香の方も字が違うね。後ね、星香が俺の手を握った時に気が付いたんだけどね、星香の手も震えていたんだ。ここで漢をみせなけりゃあ漢じゃねえな。なあ、一馬（ユニコーン）よ。

作りはメッチャ雰囲気が出ている。建物は元からあった廃病院を使っているらしい。

正直に言おう、ちびってしまいそうです。俺、霊的なもの一切ダメなんです。

マジで、でそうな雰囲気があるんですが……ていうか、マジで出るんじゃないか？　特に深夜とか……ていえるほどのマジでヤバそうなお化け屋敷です。

「い、逝くぞ。星香。」

「は、はい。」

二人して、声が震えていた。さあ、逝ってきます。

「お二人ですね。では、どうぞ。」

係員にパスを見せて、暖簾を潜った。

もう、そこから先は思い出したくない。二人して、『ぎゃあああぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあああぁぁ！！！！！』てガンガンに叫びまくった。

怖すぎて、マジで脱糞しそうになりましたよ。割とガチで……そんな事は命に代えてもしないけどな。

何なのあれ、地を這うゾンビ。空から降ってくるゾンビ。外の窓から入ってくるゾンビ。地面から手を突きだすゾンビ。

ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビ。ゾンビだらけで、頭が可笑しくなりそうだった。

一番のインパクトは、ゾンビが壁をぶち破って、そこから全力ダッシュして追いかけられたときは、マジで俺ら二人も全力ダッシュで逃げた。

もう嫌だ。

もう、お化け屋敷なんて入らないぞ。よくギャルゲーの主人公とヒロインがお化け屋敷に入って、主人公は良い思いをするけどな。このお化け屋敷はそんなレベルじゃない。

下手すりゃあ、トラウマレベルだ。それほど完成度が高くて、滅茶苦茶怖いお化け屋敷だった。

「せ、星香。だ、だだいじょうぶか？」

「お化け怖い。お化け怖い。お化け怖い。」

ヤバイな、変な意味でトリップしてやがる。困ったぞ。

「こうなったら。」

パンっ！！　という手と手を打ち合わせた音が響いた。ようは星香の目の前で思いっきり両手を叩いたんだ。

「はっ！」

よし、正気に戻った。

「大丈夫か？」

「私は、一体？　思い出そうとすると、頭が痛むんですが？」

完全にトラウマになってるね。

「大丈夫だよ星香。何も無かったよ。そう、何も。」

「そ、そうですか。ユー君がそういうなら信じます。」

「それにしても、腹減ったな。」

時間を確認してみると、昼丁度の時間帯だった。

「そうですね。なら、あそこのベンチに座ってランチにしましょう。今日は頑張ってお弁当を作ってきました。」

そういって、バックを掲げる。

すぐ傍にあったベンチに腰をかける。星香は中から四段ぐらいになっている弁当箱を取り出して、箸と布巾を取り出した。

「あれ？」

「どうした、星香？」

「飲み物を忘れてしまったようです。」

「そうか……よし、俺が買って来よう。」

「お願いしますね。ユー君。私は麦茶でお願いします。」

「了解。」

俺はベンチから腰を上げて、早歩きで自動販売機を探しに行った。
さあ、急ぐぞ。こういう時に展開に限って、戻って来た時に星香が誰かに絡まれている可能性は９９％位ありそうなんだよな。
特に、星香がメッチャ可愛いのが一番の理由だろうな。

ベンチから１００ｍ位離れた所に自販機があった。思っていたより遠くにあったな。
５００円玉を入れて、麦茶と緑茶を買った。
そして、ダッシュ。

「放してください。」

「良いじゃんかよ。一緒に遊ぼうぜ。」

「遠慮します。連れが居ますので。」

「そんな奴と遊ぶより、俺らと遊んだ方が楽しいよ。」

やっぱり、当然の如く。ベタなガラの悪いチャラ悪に絡まれていた星香。
人数は二人。
俺は重い足取りで近づいていく。

「おい、何勝手に人の連れに手を出してんだ。」

チャラ男その１の肩に手を置く。

「ああん、何だてめえ、は……」

「デカ！！」

語尾が小さくなっていく。それもその筈、一応俺の身長は１４歳でありながら１８０ｃｍ超えているんだ。
それに比べて、チャラ男その１とその２の身長は１７０ｃｍあるか、無いかだ。

「おい、何人の連れに手を出してんだって聞いてんだよ！！　聞こえてねえのか？」

自分なりに結構ドスの効いた声で言ってみた。
するとどうだ、チャラ男その１とその２は『ひぃぃぃぃぃぃ！！』て言いながら逃げて行った。

良かった殴り合いにならなくて。俺喧嘩なんてやったことないし、痛いの嫌いだから。

その証拠に、俺の脚が微妙に震えていたんだ。この事は内密にお願いしますね。

「星香、何もされてないか？」

「はい、大丈夫です。ユー君が助けてくれたおかげです。」

頬を緩ませている星香。なぜ？

「星香が無事なら良かった。それにほら、コレ。」

星香に麦茶を渡す。

「ユー君。ありがとうございます。」

「じゃあ、食べようぜ。星香のお弁当。」

「はい。」

『いただきます。』

ジューシーな唐揚げに、トロっとした卵焼き。サクサク衣のエビフライに色々な具があったオムスビ。ポテトサラダと色々な食べ物があった。

どれも、文句なしにすごく美味しかった。

最高に美味いよ星香。

食べ終わり、遊園地も後半戦に移る。

第八話　一馬（ユニコーン）の休日その４　（後書き）

次回、遊園地編後半です。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その５　（前書き）

更新です。

今回は何時もよりカッコイイ一馬（ユニコーン）です。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その5

星香の手作り弁当も食べ終わって、今はベンチで食後の休憩。
食後に行き成り動くと、横腹痛めるので、皆さん気を付けましょうね。特に走ったりしたら地獄を見ますよ。

買ってきたお茶を飲みながらのんびりと俺は空を見上げていた。

雲って良いな。自由で……俺もあんな自由になりたいな。好きな様に姿を変え、好きなように流れる。羨ましいな。

何か爺臭い思考だな。そうだよな、実際転生前と転生後の精神年齢を足すと32才だからな、よくよく考えると先進年齢三十路を超えた只のオッサンだな俺。

自分の事は「俺」ってよんでるけど、オッサンだし「わし」って言おうかな……止めよ。さらに老けそうだ。

隣を見ると、星香がコクッコクッと頭を上下に動かしていた。もしかして、眠たいのか？　まあ、分らんでもないな。
満腹でしかも、丁度良い暖かい気温だからな。眠くなるのも分らんでもないな。

実際に俺も少しだけ、眠くなってきているしな。

すると、トンッという感じに左肩に少しだけ重みを感じた。

そちらの方に視線を移すてみると、星香が俺の左肩に頭を置いてグッスリ寝ていた。星香のシャンプーの甘く良い香りが鼻孔を擽る。

俺は無意識の内に星香の髪に手を伸ばしていた。

そして、星香の髪を撫でそうになった所で、

「俺は何をしているんだ。」

スグに手を引っ込めた。このままじゃ少し寒いだろうと思い、俺は頑張って着ている上着を星香が起きないように頭が落ちないように脱いだ。

難易度１０がｍａｘだとしたらこれは難易度８位あるぞ。そんなどうでもいい事は良いや……

俺は星香に俺の上着を前から羽織らせた。するとどうだ、星香の右手が俺の裾を掴み、左手で俺の上着を掴んだ。

一瞬起きているんじゃないかって疑ったが、どうでもいいやっていう感じで流した。

お茶をチョビチョビ飲みながら、行き交う人達を見つつも空を見上げて雲を観察する。こういうのんびりいしる日も良いな。

さてと、この後に今までの良いことがひっくり帰るような不運が俺に襲いませんように、最後まで何もありませんように、一応神頼みをしておく。今日で何回やったか分らない神頼みだ。

やっぱり日本って平和だな～中東部の国の方では内線やら隣人国と

の戦争、また他の所では麻薬の密売人だけが居るような街もあるって聞いたし、マフィアが数多くいるっていう国もあるって聞いた。

そう思うと、日本って平和だな。

何か性分でも無いことを考えてしまっていたな。

また俺は行き交う人達（カップルと家族連れが多し）と空を見上げて雲を見ながらボーっとしていた。本当に良いな。こういうのんびりした事が出来る日っていうのはね。

それから大分時間が経ち、空の色に赤みが出始めた所だ。星香は未だに寝ていて起きる気配は無い。

起こすのが申し訳ないがそろそろ起きないと、時間が無くなるよ。

「星香。そろそろ起きろ。」

「う～ん。後一万年。」

「マジで居たよ。寝つつもこんな事を言うやつが現実に居た。」

その事にお兄さんはビックリ仰天だよ。そんな事はいいとして、

「はよ起きろ星香。」

「んですかユーくん……わたしのねむりをさまたげるとはいいどきょうですね。」

「そんな事を言ってる場合なのかな。」

「はえ？」

目をパチクリさせ、頭を起こして辺りを見回す。その際に掴んでいた俺の服の裾と羽織らせていた上着を話した。上着がパサッと落ちた。そしてテンテンテンっというのが、今星香の頭の中を支配しているだろうな。

「あの～ユー君。」

「うん、どうしたんだいへへいへいへい。」

「今、忌野清志郎さんはいいです。」

「はい。」

そんな凄みを効かせた声を聞いたら、従うのは当り前です。

「今、何時ですか？」

「もう、午後の5時過ぎだよ。」

俺の言葉を聞いた星香は頭を押さえた。

「何て事でしょうか。私は大変な失態をおかしてしまいました。」

星香がとつぜんガバッと立ち上がって、俺の前まで来た。え？　何？　起こしてくれなかった俺に対しての鉄拳制裁パンチを食らわす気ですか。そうですか？　なら来なさい。俺はいくらでも受け止めてやるぞ。

さあ、来い！！！！！

覚悟を決めた。しかし、痛みは一切襲ってこない？　なぜ？

「ごめんなさい。」

「え？！」

星香が頭を下げた。なぜ？

「私のせいで、わ、わたしの、っせ、せい、で」

呂律が回らないのか、きちんと喋れていない。

「本当にごめんなさい」

そう言って、どこかに駆けだしていった。

星香が泣いていた。その事に俺は頭が真っ白になった……星香が泣いていただと？　直ぐには信じられなかったが頭が覚醒してきた。

「ああもう、世話をかけさせる！！」

俺も立ち上がり、星香がバックを置いたまま走り去ったのでそれを片手に持った。そこで、俺らの一部始終を見ていた二十代前半のカップルが俺の傍までやって来た。

「頑張りなさい。」

「女を泣かせたんだ。その責任はキッチリとってやれよ。」

そうやって、心配して声をかけてくれる人が居たんだな。

「ああ、分っている。」

俺は走り出す。全力で走る。

人に当たっては「すいません」と謝りながら、人が行き交う遊園地の中を走る。多分、そこまで遠くに行ってはいないはずだ。

もう、なんで星香が謝るんだよ。そんな必要は無いだろうが！！謝るとしたら俺の方だろう。

星香が楽しみにしていた遊園地。

そんな大切な事も忘れて俺は、肩にある星香の温もりが暖かいことを良いことに、星香を起こさなかったんだ。

そんな俺が星香を泣かせたんだ！！　つくづく思うよ。俺は最低の男だってな！！！！！　多分、あのクソナルシストより最低な男だ。

俺は！！！！！　そんな自分が嫌になる。

そうやって、後悔するのは後だ！！　今は星香だ。

「星香！！　星香！！　どこいるんだ！！」

反応してくれるわけないか。クッソ！！

走り続ける。俺は止まる気は一切ない。星香が見つかるまで、絶対に俺は足を止めない。

辺りを見回すと一か所だけ目に止まった。

そこは……「ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ」もう、俺が一生乗らないと誓ったジェットコースターそこの最後尾に星香が居た。

一瞬だけ目を疑ったが、直ぐに星香の所までダッシュした。幸い星香にはバレルことなく、隣まで来た。

すると、俯いていた顔を上げて俺の方を見た。

もう、涙を流していなかったが、目が赤く腫れていた。

俺のせいでか。マジで最低の男だな。

でもなそんな最低の男でも、俺は最低の中の最高の男になろう。星香を泣かせた、勿論俺のせいだ。

だけどな、星香が楽しみにしていた遊園地を悲しみで終わらせる気は全く無い。最後は楽しかったって言わせてやる。そうすりゃあ最低の中でも最高の男だろう。

俺は星香の頭に手を置いて、繊細なものを取り扱うように優しく撫でた。

「ユーくん。」

何度も何度も撫でた。

「星香が謝る事なんて一つも無いんだよ。」

「で、でも！！」

「でも案山子もあるか。謝らないといけないのは俺の方なんだよ。」

「ユー君。」

「俺はな、星香が楽しみにしていた事を完全に忘れて、自分に甘えて、そして星香に甘えて起こすことをしなかったんだよ。その結果が星香を悲しませたんだ。だから、スマン星香。」

「……っぷ。」

「へ？！」

星香が吹いた？　どういうこった？　手を口元にあてて笑っているだと。

「本当にユー君は……私は只もう一度『ｄｅａｄ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ』に乗りたかっただけですよ。」

「え、えええぇぇぇぇぇえええ！？」

人目を気にせずに大声で叫んでしまった。ああ、人目を集めてしまった！！　恥ずかしい。

だが、そんな事は嘘だとすぐにわかった。だって、星香の頬に涙の跡がクッキリと残っていたからだ。

「そうか。なら、一緒に乗ろうか？」

「え？！　良いんですか？」

何でビックリするのさ。

「一人で乗るなんて水臭いぞ。二人一緒に来てるんだ、なら一緒に乗って共感しようや。」

「はい。ユー君。」

やっと笑ってくれた。

さあ、もう一回地獄を味わってきますか。まさか、もう二度と乗るかって誓ったその日にもう一度乗るなんて……ついてねえな俺って奴は。

「ユー君。何で笑みを浮かべているんですか？」

「お？！　笑みを浮かべていたか？」

「はい。何か嬉しいっていう感じの笑みを浮かべていましたよ。」

そうか、偶には運が無くても良い事があるって分ったからな。

「さあ、星香覚悟を決めておけよ。」

「もう、並んだ瞬間から覚悟を決めています。」

「「いざ、出陣！！！！！」」

『ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』一生分の叫び声を二人一緒にあげた。こういうのも良いよな。

また、先ほどと同じ状況にあった。気が付けばベンチに座っていた。マジで三途の川の半分以上も進んでいたよ。危ない危ない、もう少しで完全にあの世に行ってたよ。まったく、川の向こう側でなのは（１９才ｖｅｒｓｉｏｎ）が全裸でこっちにおいでって手招きするから、つい誘われちまったじゃねえか。流石なのは、フェイト程のスタイルじゃ無いけど、バランスが良いエロい体してやがった。

まてよ、星香も元々はなのはから作られたようなもんだから……グボハ！！！！！　エロい。星香の体もエロくなってしまう。ｇｏｄｊｏｂだ！！！

「いた！」

気絶から目を覚ました星香が、俺の足を踏みつけていた。

「あの～星香さん。何で私目の足を踏んでいるのでしょうか？」

「何となくです。」

「さいですか。」

とは言っても、星香はすぐに足をどけてくれた。

「ユー君。」

「うん？」

「今日はありがとうございました。」

星香が満面の笑みで俺に笑いかけた。

「あ、ああ。」

俺の顔は茹でタコのように顔を真っ赤にしているだろう。ダメ俺、星香の笑顔に弱いわ。

これあから星香は可愛いんだよ。

この時たま見せる感情を表に出した最高の笑顔が……この笑みが見れて良かった。今日の疲れが吹っ飛んだわ。

「ユー君。帰りましょう。」

立ち上がった星香が、座っている俺の手を引っ張る。

「良いのか？　まだ閉まるには時間が余っているぞ。」

「良いんです。」

「そうか、星香がいうなら良いけど。」

「ですけど、」

「うん？」

星香が急に顔を近づける。

「もう一度連れて来てくださいね。その時はうんっと一杯楽しみましょう。今日以上に。」

「ああ、そうだな。星香。」

こうして、俺の休日は過ぎて行った。この日の帰りに折角隣町まで来たから、飲食店によって夕食をすまして家に帰った。

夕食を外食で済ました一番の理由は、家に帰って作るのが面倒臭いからだ。

第九話　一馬（ユニコーン）の休日その５　（後書き）

よく頑張った一馬（ユニコーン）

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて　（前書き）

更新です

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて

週初めの学校ほど面倒臭い事はこの世に無い。

昨日は大変だった。完全に宿題をやるのを忘れていたせいで、気づいたのが寝床に着いた時だ。
宿題なんてやりたくないんだが、一応やっておこうっていう感じでやり進めた。

宿題は国語・数学・英語の三教科が出ていた。

中学レベルの数学なんて簡単すぎて途中式は一切無く。答えだけを書いている。
答えのプリントを貰っているが、見る必要性が感じられない。簡単すぎる。

他の教科も同じだ。それでも、量がオカシイほど有った為に終わるのに3時間以上もかかってしまった。俺の睡眠時間が減っていく。
そして、学校では居眠りもサボりも出来ない。

俺の命減ってゆくだけ。

ああ、学校めんどい。だが、行かなければならない。

親が金を払って行かしてもらっているんだ。行かなければ親不孝というものだ。
まあ、あの親だから行かなくても親不孝なんて思わないだろうが俺が気にするんじゃい。

教室に入ると……あれ？　変態（はやて）とバーニングとすずか（バーニングの嫁）しかいない。
という事は、寝・れ・る！！！！！　居眠りできる。特にあのクソナルシストが居ない。

よっしゃあぁぁぁぁああああ！！！！　吼えたで、俺の魂燃えたぎるううううう。

早速カバンを枕代わりにして、お休みなさ～い。寝た。
クラスの奴はもう、慣れたのか誰も気にも留めていない。

ユッサユッサ。ユッサユッサっと誰かが俺を起こそうと揺らしている。
誰だ、俺の聖地を汚す輩は！！　重たい瞼を開けて、顔を上げるとはやてが居た。なぜはやてが俺を起こそうとする？　大抵はバーニングの筈だろう。

疑問に思っていると、はやてが俺の耳元に口を近づけた。何か興奮する。

「最新情報が入ったで。」

「なんだと。それは真か？」

はやてよくやった。流石はやてだ。

「そうやで、うちの情報に狂いはないで。」

「そうか、それは誰のなんだ？」

「なのはちゃんと、アリサちゃんと、すずかちゃんや。」

「うぉぉおマジか！！」

興奮して声がついつい大きくなってしまった。

一斉に視線がこちらに集まる。

「静かにしいや。一君。」

「かずくん」俺ははやてにそう呼ばれている。なのはもすずかも俺の事は「かず君」と呼んでいる。

その呼び方をするのは、去年俺と関わりがあったメンツだけだ。

アイツだけは「一馬（ユニコーン）」て呼ぶけどな。

「おっと、スマンスマン。」

お口チャックする。

「はやて。その情報は何時の時の情報だ。」

「ふふん。コレはな先週の金曜日にうちが直々に確かめたんや。」

「流石はやてだ。」

「褒めても、何もでぇへんで。」

「知っている。」

二人して、笑みを浮かべる。誰も近寄ろうとはしない。

だろうな、コソコソと話していて、イキナリ笑みを浮かべる奴なんかと関わりたくないよな。

「ほいで、誰のが知りたい?」

「なのはだ。」

即答する俺。

「ホホウ、ええ趣味や。」

「だろ。」

「なら、何をくれるんや?」

情報を与えてくれる代わりに、こちらははやてに何かを差し出さなければならない。

何の情報かって? そりゃあはやてと言えば一つしかないっしょ――――――――――おっぱいだ!!!!!

「これで、どうだ？」

そういって、俺がはやてに渡したのは……写真。とある写真。

「ナイスや、一君。」

「だろ。」

ドヤ顔をする。マジで俺もいい仕事しただろう？　はやて。

「これなら、うちの情報（おっぱい）を渡しても申し分ない。」

その写真に写っていたのは、なのはの姿が映った写真だった。しかし、只の写真ではない。

なのはが、珍しく学校で居眠りをしてしまっている写真だ。しかも、デヘヘヘヘって満面の笑みで涎を垂らしているんだ。

最高の一枚だろうはやて。これは俺以外には誰にも見せていない、秘蔵写真だ。

「なら、早く教えてくれよ。」

「良いで、先ずはさわり心地な。」

「ゴクリ。」

つい、効果音を言ってしまった。

「良い感じに弾力があってな、それでいてマシュマロみたいにスベスベしとるんや。」

「うぉぉおおお！！」

やべぇ興奮するぞこれは。

「揉み応え抜群や。」

流石はやて閣下だ。最強の聖書（おっぱい）だ。

「サイズのほうはな。」

「うんうん。」

「大きくなっとったで、多分Cカップはかたいで、まだまだ成長のよちありや。」

「はやて様様だな。」

はやてを奉りそうろう。したい気分だ。

「ついでに、もっと良い情報を教えたるで。」

「おお、教えてくれ。」

「誰にも言わんて約束してな。」

「ああ、約束する。」

ほな、こっちに移動するで。俺は立ち上がって、はやてと一緒に廊下に出て端の方まで行った。
生徒の数が少ない。

「なのはちゃんのおっぱいな。」

「うんうん。」

「メッチャ敏感になっとたで。」

「な・ん・だ・と！！」

自然と声が大きくなってた。

「マジやで、揉んだ瞬間に甘く良い声を上げたんや。しかも一揉みする度に良い声を上げるんや。うちも興奮してもうたっていうより、興奮せん方が無理やで。」

「ヤバイなそれは。」

想像してしまった為か俺の息子が「呼んだ？」って返事をしてきやがった。「呼んでねえよ」ていったら元に戻った。良かった。

「多分な、おっぱいはなのはちゃんの性感帯やと思うで。」

俺とはやては厚く握手を交わした。

「「ｇｏｏｄ　ｊｏｂ．」」

こうして休憩時間は過ぎて行った。

流石おっぱい神。はやて様だな。一生ついていきます。

第十話　一馬（ユニコーン）とはやて　（後書き）

さすがおっぱい聖書はやてです。

第十一話　クソナルシストのこれまでその1（前書き）

更新です。

ナルシストの彼奴は書いていて、イラッて着ました。

第十一話　クソナルシストのこれまでその1

初めましてだな、俺は風間恭仁。

無敵の容姿、最強の魔力。そして、最強の能力。黒髪に黒い瞳。これほどの主人公気質の才能を持ち合わせている奴なんて俺しか居ないだろう。一応、俺は転生者だ。最高にイケメンの転生者だ。

そういう俺だが、転生する前は酷かった。

引きこもりの、デブで眼鏡のオタクだ。

可愛い女の子、綺麗な女の子との出会いなんて何一つも無かった。

そんな俺は、自分が嫌になり。人生も嫌になった。学校に行っても虐められ、家では俺の事なんか無関心な両親。離れていく昔の友達。

しかし、そんな生活もこれで御終いだ。俺は転生黒魔術という本を裏ルートから手に入れて、自分を生贄に捧げて死んだ。

半信半疑でやってみたらどうだ？　マジで転生できたぜ。

しかも、最強に強く、イケメンに生まれ変わっていたぜ。こんな最高な事なんて、世の中早々ないぜ。

更に、転生した世界があの『魔法少女リリカルなのは』の世界だ。

俺が一番好きなアニメだ。ゲームもノベルも全部読んでいる。

今から俺様の時代が始まるぜ、俺はハーレム王になる。まずはなのは達から落とそうか。

よっしゃ！！　このままハーレムエンドに一直線だぜ。

まずはＰＴ事件。

俺の最強過ぎる魔力で無双してしまうと意味がないな。此処はリミッターをかけて、ＡＡ位まで落としておくか。

これなら、大丈夫だろう。

黒い奴はフルボッコにして、淫獣もフルボッコにしてやった。何でか知らんが、なのは達に睨まれた。おいおい、恥ずかしがらずに俺に感謝すればいいのに……

完全に原作Ｂｒｅａｋ！！　プレシアとアリシアが落ちるときに助けた。更にジュエルシードを使って、プレシアさんの不治の病を治して、アリシアを復活させた。

その後に、プレシアをフルボッコした。流石俺！！

俺は常にイケメン振りを見せていた。もう、内面も外見も俺ほどのチート過ぎるイケメンはこの世に居ないだろう。

これで、先ずはフェイトとなのはが堕ちたな。いや、もしかするとアリシアも堕ちたかもしれねえな。

だけどな、なんで俺を誘ってくれなかったんだ？　なのはとフェイトの友達になる感動のシーンを……そうか、分ったぞ。

俺に涙を見せたくなかったんだな。それならそうと言ってくれれば良いのに。本当に水臭いなあ～俺は全く気にしないのに。

闇の書事件では、なのはを常に護衛をしていたおかげで、大事に至らずに済んだ。

良かった。なのはが家を出てからずっと後ろから着けていたかいがあった。そんな事をしてなのはは嫌がらないかって？　そんなわけないだろう。

なのははもう堕ちてんだよ。なら、ストーカーまがいな事をしても大丈夫に決まってんだろう。どちらかというと、喜ぶに決まってんだろう。

俺様にストーカーまがいな事をされているんだからな。

何でか知らんが、ヴィータがなのはに同情の視線を送っていた。なぜだ？　そんな事はどうでも良い。

本当は俺の魔力を蒐集させてやろうと思ったんだが、それだとデバイス強化の話が無くなってしまう可能性があったので、なのは蒐集はされた。

すまないな、なのは。後で沢山頭をナデナデしてやるから、それで許してくれよ。

そして、最終決戦。これまで来るのに結構時間を喰ってしまったな。こうなるんだったら、俺の魔力を蒐集させておけばよかった。

今から、フルボッコタイムが始まる。でもさ、俺が知らぬ間に此処まで話が進んでいたんだよな。なぜ？

今回は色々と足を引っ張ってしまったから、ここで挽回をしておかないといけないな。

でないと、はやてとヴォルケンズを堕とせない。

此処で俺はリミッターを全解除。

俺を中心に突風が吹き荒れた。

みんな驚愕している。当然だ！！　俺の魔力はＳＳＳオーバーなんだからな。

さあ、今かずっと俺のターンだ。通常モードのブレイドフォームからバスターフォームに移行した。

俺自身の魔力を殆ど使い、疑似元気玉を作った。

それを防衛プログラムにぶっ放した。大笑いしながらぶっ殺したぜ。

完全消滅。しかも、何でか知らんがリインフォースが消えなければならない理由も無くなっていた。

流石俺様だ。

これで、はやてとヴォルケンズ。さらにリインフォースも確実に堕ちたな。

これで、俺のハーレムエンドが待ってるぜ。

第十一話　クソナルシストのこれまでその１（後書き）

その１なので、その２に続きます。

第十二話　クソナルシストのこれまでその2（前書き）

更新です。

クソナルシストのお話は次回で終わりです。

後、ぶっちゃけトークをしています。

第十二話　クソナルシストのこれまでその2

――――――

それとジェイル・スカリエッティ覚悟しておけよ。俺のなのはに手を出そうとしたんだからな。

俺が断罪してやるからよ。

それから、一週間後位に、微妙な時期に一人の男子が転校してきやがった。コイツは気にくわねえ。
何でか知らんが、そう感じたんだ。

話したことも、顔を合わしたことも一度も無いが、なんか気に食わねえな。

俺は、管理局員になった。

学校に行きながらも、局員として活躍しまくっている。

その分、忙しいのか会う時間が無くなってきた。最近じゃ一か月前以上に一回話をして終わった。
もお、俺がモテるから嫉妬して、俺が嫉妬するように仕向けても無駄だよ。俺にとって君たちが一番なんだからな。

早くｓｔｒｉｋｅｒｓの話にならないかな。

俺に滅茶苦茶可愛い、キャロとヴィヴィオという娘とエリオという

息子が出来るんだ。俺って滅茶苦茶強いから、もしかしたら、ヴィヴィッドでアインハルトちゃんから告白されるかもしれんな。

あ、そうだ。カリムとシャッハ。他にも沢山の美人が居るからな…堕としておかないといけないな。俺様のハーレムエンドの為に！！！！！

ヤバイな、俺って罪な男だな。

さあ、早く時よ進め。

中学生になった。原作と違って、共学になっていた。もう最高だぜ。これで、いつでもなのは達に会いに行けるし、合いに来てくれる。

だがな、アリサとなのはとはやてとは一年の時は一緒のクラスになれなかったが、フェイト達が揃っていたから良いとしよう。

「よ、よろしくね……」

「う、うん。」

「よろしく。」

おいおい、恥ずかしがるなよ。それとも、俺が格好良過ぎるから、

自分たちが見劣りしてるんじゃないかって心配しているのか？　そんな事は全くないよ。

学校の中でも、君たちが最高なんだからな。

全くｓｈｙｇｉｒｌなんだから、君たちは……俺が嫌われているのは１００％ありえないけどな。俺が嫌われるわけないじゃん。

性格も外見もイケメンな俺が嫌われるわけが無い。

どっちかというと、モテるに決まっている。今日も後輩、六年生の女子から告白されちまったぜ。

当然断ったよ。もう俺には決めている人たちが居るから……なのは達がな。

「お前たちは最高に可愛いんだから、そんな苦虫を噛ったような顔をするなよな。」

キラーンっと真っ白な歯を見せる。決まったな。

「……（早く、この汚物を誰か焼却して）」

「う、うん。ありがとう……（早く死んで、一生のお願いだから）」

「……（良いな、なのはとアリサとはやて。クラスに此奴がいないから……誰か変わって、助けて。）」

「「「（（（（お願いだから、早く死んで！！！！！！）））」」」

心の中で完全にシンクロしていた。

「今年いっぱい、よろしくな。アリシア、すずか、フェイト。」

「よろしく……（もう、此奴と一緒のクラス嫌だ。）」

「うん……（イキナリ、頭を撫でないで、害虫さん。）」

「よろしくね……（本当に誰でもいいから助けて、もう嫌だ……私、鬱病になりそう。いっそ、転校しようかな。）」

完璧に嫌われていた。風間恭仁だった……しかも、その事に全く気付いていない最悪のパターンだ。

ある意味では、なのは達も全く運が無い。

しかも、今年は全員そろっている。一番最悪だ。

昼休み、何時もの屋上に六人が集合。

「ねえ、フェイトちゃん。私、すごく転校したいの。」

「うん、私もだよ。なのは……その気持ち凄く分る。」

全員が全員うなずく。激しく同意していた。

「いい加減にしてほしいわ。何なの彼奴？　突然コッチを向いてはウィンクしてくるわ、スマイル浮かべてくるわ。そして、何なの頭撫でるとか！！　マジでキモイんですけど。死んで欲しいんですけど。」

「いうねえ、アリサ。まあ、私も同意見なんだけど……誰か、彼奴を消毒してほしいんだけど、やっぱりはやてもすずかも一緒？」

「当然や！！　もう嫌や。うち、鬱になりそうや。家に帰ったら絶対にリインに愚痴っとるで……リインもうちの気持ち分ってくれとるで。ヴィータがアイゼン持って殺しに行きそうだったんよ。」

「私もだよ、もし来年一緒のクラスになったら。絶対に私転校する。もう決めた、絶対にする。もしくわ、恭也お兄さんに抹殺の依頼をお願いするわ。うん、それが良い。」

「「「「「私もだよ。」」」」」

決意は固いようだ。

「でも、アリサちゃん。」

「うん？　どうしたのすずか？」

「思ったんだけど、転校しちゃうともう、一君と会えなくなっちゃうなって。」

「そ、そうね。」

明らかに動転しているアリサ。

「前々から、思っとったんやけど。アリサちゃは何であんなに一君に絡むん？」

「な！　ななな何言ってるのよ！！　き、きききのせいよ。」

「怪しいで、アリサちゃん。」

「「「うんうん。」」」

腕を組んで、頷くなのはとフェイトとアリシア。

顔を真っ赤にして俯くアリサ。

「そ、そういうなのはとはやてはどうなのよ？！」

「「え！？」」

どうだ、参ったかっていう表情をするアリサだが、次のはやてとなのはのセリフに動揺しまくった。

「うちは、好きやで一君の事。ていうか、うちは一君と付き合いたいって思っとるぐらいやで」

「うん、私もはやてちゃんと一緒かな……私も一君の事好きだよ。でないと毎回授業中居眠りを起こそうとしないし、話そうとも思わないよ。それに一君の傍に居るだけで楽しいもん。」

なのはとはやて以外が固まる。石造の様に固まってしまった。

「アリサちゃん、素直にならないと後悔するかもだよ。」

「うっ！？」

更に激しく同様するアリサ。そして、うんうんと頷くメンツ。

「アリサ、もう私たち分っているんだよ。」

「私って分りやすい？」

「「「「「うん。」」」」」

「あああああああああああ！！！」

頭を抱えて叫んだ。

「ねえ、フェイト？」

「どうしたの、アリシア姉さん。」

「フェイトは一君の事どう思っているの？」

「う～ん。まだ分らないな、初めて一緒のクラスになったから。そういうアリシア姉さんは？」

「私もフェイト一緒だよ。」

こうして、長い長いガールズトークが始まった。主にアリサ中心の話題ばっかりだった。

第十二話　クソナルシストのこれまでその２（後書き）

なのはとはやて、ぶっちゃけてしまいましたね。

さて、なのは達が星香と出会ったら、一馬（ユニコーン）の争奪戦が始まりますね。

第十三話　クソナルシストのこれまでその３　（前書き）

更新です。

今回も短いです。

第十三話　クソナルシストのこれまでその3

最近というか、去年あたりからなのは、はやて、アリサ、すずかが一人の男の所に集まっているときが多くなっている。

今では、なのは、フェイト、はやて、アリシア、アリサ、すずかの全員があの男の所に集まっている。殆ど毎回のようにだ。

しかも、その男は俺が気に食わない男だった。

一体どういう事なんだ？　それで、今はどうだ？　みんなと一緒のクラスになれたが、アイツも居やがった。クソ！！

まあ、当然みんなは俺の所に来るものだと思っていたのに、なのになんでなのは達はあの男の所に集まっているんだよ。

しかも、休憩時間に必ず……

なのはの隣で、しかも授業中居眠りばっかりしていて、全く冴えなくて、只身長が俺より１０ｃｍ以上高くて地味な眼鏡をかけている奴なのに、どうして彼奴の所に集まるんだ。しかも名前が一馬（ユニコーン）って厨二乙な名前のなのに、何でなんだ？　どうして俺の所に来ないんだ。

なぜなんだ？

まさか、俺に嫉妬してもらうためにワザとやっているのか。そうかそうか、そういう事だったんだな。決して俺の事を嫌っているわけではないんだな……まあ、そんな事は１００％有りえないけどな。

もう、なのは達は俺にメロメロでラブラブ光線を放っている位だからな。

そうなんだが、絶対に話しかけているのはアイツからじゃなくてなのは達からなんだ。

最初は、なのは、はやて、アリサ、すずかからだったが……今では、フェイトやアリシアまでもが自分からあの男に話しかけている。

しかも、楽しそうに話していて、なのは達が笑顔に包まれている。

特にはやての場合だと、休憩時間や昼休憩の残り１０分位になったところで二人で隅の方で話しているときが多く、日に日に増えて行っている。

現在、その事が俺らの学校中で話題筆頭になっている。

本人たちはその事を全く知らないはずだ。

六大美女のなのは、フェイト、はやて、アリシア、アリサ、すずかが一人の男に対して積極的に話しかけているという噂が絶えない。

それが、クラスに居る時だけではないらしく、保健室ではアリサがよく、一馬（ユニコーン）と一緒に居ることが多いと目撃証言がある。

もしかして、彼奴に何か弱みでも握られたんじゃないのか……そうか！　そうに決まっている。

でないと、なのは達はあんな冴えない奴の所に行くわけが無い。

何という事だ！！　俺が一馬（ユニコーン）というやつの魔の手からみんなを守らないと！！

しあし、風間恭仁の考えは全く当たっていなかった。どちらかというと、風間の事が嫌いで嫌いで堪らなく。一馬（ユニコーン）に好意を抱いているから、なのは達が彼のもとに集まっている。

そんな事も分かっていない風間恭仁。自分の事が嫌われているとは、全く思っていなく、好きで好きで堪らないと思っている。

思考が完全に可愛そうな人になっている。

只のムカツクアホであり、汚物でもある存在。

俺は机から立ち上がって、なのは達が集まっている所に行った。その中心人物である一馬（ユニコーン）の所に向かって。

俺が近づくと、なのは達が道を開けてくれた（実際は、風間が来たせいで嫌な気分になり離れただけである。）

「おい、お前。」

「げ?!」

失礼な奴め。俺の顔を見て「げ?!」て言いやがった。

まあ良い。貴様にはなのは達を傷つけさせない!!　なのは達は俺が護る。

「今日の放課後、体育館裏まで来い。決闘だ!!」

一馬（ユニコーン）おろか、なのは達までも完全に固まってしまった。完全に氷河地帯に移り変わってしまった。

「お前の好きなようにはさせない。俺がなのは達を救ってやる!!」

クラス全体に聞こえるように高らかに宣言した。決まったな、これで、更に好感度上がったな。

これで、完全に俺以外の男に目を向ける事は無くなった。

俺は自分の机に戻っていった。

後ろで、なのは達が俺に何かを言っていた。ハッキリ聞こえなかっ

たが、何を言っているのか簡単に検討が付く。

「頑張って恭仁君」てエールを送ってくれたんだ。まかさせな、お前たちの事は俺が絶対に護ってやるから心配するな。

実際なのは達は、恭仁にエールなんて全く送っていなかった。

どちらかというと、一馬（ユニコーン）にエールを送るような感じの事を言っていた。

第十三話　クソナルシストのこれまでその３　（後書き）

次回は一馬（ユニコーン）と風間恭仁が戦います・・・・・・多分。

第十四話　一馬（ユニコーン）ＶＳ恭仁（クソナルシスト）（前書き）

更新です。

一馬（ユニコーン）が戦います。

第十四話　一馬（ユニコーン）ＶＳ恭仁（クソナルシスト）

は?!　何なんだアイツは一体?　いきなり俺の所に来たと思うと、マジで唐突に「今日の放課後、体育館裏まで来い。決闘だ!!」なんて言いやがった。

おい、誰かアイツに精神科の腕の良い先生を紹介してやれ、そして真っ当な人間という生き物に戻してやれ、アイツは害虫以外の何者でもない。

更に、「お前の好きなようにはさせない。俺がなのは達を救ってやる!!」って大声で言いやがった。マジで誰かコイツを病院に連れて行ってやれ、頭の中をキレイにリフレッシュさせてやってくれ。

「一君、あんな奴のいう事ほっておいていいよ!!」

「そうやで、一君。あいつ、あんなんやけど、戦闘能力はチートみたいな奴なんや!!」

真っ先になのはとはやてが声を荒げた。マジか!?　なのはとはやてがそんな事を言うなら、マジで強い奴なんだな。

「ふ～ん。」

だが、俺は完全に興味が無いというか、やる気が全くない。

ただ、俺が今日の放課後に体育館裏に行かなかったら後々面倒臭い事になるだろうな……アイツ、マジで何なん?　なあ、面倒臭い事

になる前にアイツの言うとおりにしておきますか。

嫌だな、特に痛い事なんてしたくも無いし、相手に対してもやりたくないのにな。

喧嘩とか殴り合いとか、俺大っ嫌い何だよな。マジで最近ついてねえな俺……泣けてきた。

時間が経ち、放課後になった。

俺は家にメンドイから帰った。というか、アイツは「今日の放課後」としか言ってないし、時間指定は全くしていない。

まあ、実際は準備の為に家に帰っただっけであって、今から行くところだ。

ああ、また学校に戻るとか面倒だな。

さて、行きますか。

俺はゴルフバックにある物体を二つ入れて学校に向かった。行く途中、近所の人や通行人に不思議な目でよく見られた。

一方、体育館裏の方では、なのは達が集まっていた。
恭仁はずっと、校門の方を見ていた。

「来た！！」

「遅いぞ。」

「すまない、トイレで大きい方をしていて遅れた。」

当然嘘だ。

「知らねーよ。そんな事。」

二人は向かい合う。そこから、少し離れた所でなのは達が心配そうな視線を一馬（ユニコーン）に向けて送っていた。風間には軽蔑の視線が送られている。
奴はそれを、好意の視線だと、大いに勘違いをしていた。

「それで、得物はどうする？　殴り合いでも何でもいいぞ俺は。」

「そうかよ、ならコレでやらねえか。」

俺はゴルフバックを下して、中から木刀を二本取り出した。
そのうちの一本を風間に投げ渡した。

それを空中でキャッチした。

「良いのか？　俺に剣の類を使わせると無敵だぞ？」

「構わねえよ。」

「貴様、俺を舐めてるだろ。」

凄みを聞かせた声を出す。

「ワリーが俺は、お前みたいに護りたい人の為に戦えるほど大層な人間じゃないんでね。代わりと言っちゃ何だが、俺の命を賭けよう。」

「で、お前の護りたい人の代わりに俺の命を賭ける。お前が勝っても、アイツらは今までのままだが、邪魔な俺は消える。後は好きなようにすればいいだろう。」

「勿論、俺が勝ったら、もう俺に関わるな。」

この話はなのは達の耳にもハッキリと聞こえていた。

「止めに行かなくちゃ！！」

「落ち着きなさいよ、なのは。」

「だって、このままじゃ一君が危ないんだよ！！」

「マジうあで、アイツに剣を使わせたら勝てる奴なんてこの世に居

ないぐらいの強さなんやで！！」

「それ、ほんとなの。はやてちゃん？」

「マジや。その事を良く知っている二人は居るんや。なあ、フェイトちゃん、アリシアちゃん。」

「うん、はやての言うとおり、アイツが剣を使った戦いならシグナムでさえ足元に及ばない強さなんだよ。」

「そうだよね。まあ、私は魔力が無いから何時もアースラの管理室から戦闘シーン見てるけど、化け物染みた強さなのよ。」

「「「「「「一君。」」」」」」

特になのは、はやて、アリサは飛び出して助けに行きたい……でも、今日帰る前に一君が「絶対に邪魔するなよ」て言う風に自信のある声色で言われた。

信じないわけにはいかない。

「ククク……」

「？」

「お前最高だ。俺ほどじゃないが最高に良い男だな。お前」

「ど～も、男に言われても嬉しく無いな。」

「それは、俺もだ。」

二人の間に緊張が走る。

「これで、勝っても負けても遺恨はねえな。」

「ああ、純粋に男としての勝負をしようじゃないか。」

「いざ！」

「尋常に！」

「「勝負！！！！！」」

二人は同時に駆けだした。

お互いの間合いに入り、二人は同時に木刀を振り上げる。

「あれ？」

刀身が無い？

「アレェェェェエエエ！？」

「ちょっと待て先っちょが……」

「ネエエエ

風間の顔に一馬（ユニコーン）の振った木刀が直撃して、吹き飛ばされた。体育館の壁に激突した。
痛そう音が響いた。

「甘ェ……餡子に角砂糖十個乗せるより甘ェ。」

「敵から得物かりるなんざよぉ～」

「家のチェーンソーで削っておいたんだよ。ぶん回したぐらいで折れるようにな。」

「き、貴様。卑怯だぞ。」

「は！！　こんな下らねえ事で、何かを失うなんてバカげてるぜ。全て丸くおさまれば一番だろ？」

良い笑みをしているよ一君。まるで、悪人だよ。なのは達はそう思わずにはおれなかった。

「コレ、一番丸いのか？　……」

ガクッと首を力なく倒した。

「俺、疲れたから帰る。コイツの後始末は任せたぞ。」

なのは達にそういって、一君は帰って行った。

「コイツどうする？」

アリサがドガッドガッと風間を蹴っていた。

アリサちゃん行儀悪いよ。そういうのは、埋めないといけないよ。

「ほっといて帰ろ。起きたらコイツ面倒だし。」

「そうやな、帰ろうか。」

「うん。」

みんな賛成して帰った。けど、私は……コイツを土に埋めたくて仕方が無かったの。

「おう、星香。どうだ俺の雄姿を」

「だまらっしゃい！！」

「グボハッ！！」

星香の鉄拳制裁パンチを喰らった。

もの凄く痛い。

「もう、先に帰ります。当分私に話しかけないでください。」

星香が先に帰って行った。

「くっそ、何で俺がこんな惨めな思いしなくちゃならねんだよ。全部あのクソナルシストが俺に決闘を申し込むから、いけないんだよ。ああ、面倒臭いな。」

俺は、星香の後ろ１０m位離れてついていった。

ああ、マジで運が無いな俺は。

第十四話　一馬（ユニコーン）ＶＳ恭仁（クソナルシスト）（後書き）

もう、分る人には分ると思いますが、『銀魂』のあのシーンです。

コレハ絶対にしようと決めていたので、やりました。

さいっこうに気持ちいいです。クソナルシストが吹っ飛ばされて、

外伝第一項　3年Z（ずぃ～）組　天馬（ペガサス）先生（前書き）

更新です。

分ると思いますが、元ネタはアレです。

外伝第一項　3年Z（ずぃ～）組　天馬（ペガサス）先生

とある学校のとある教室。

その教室の黒板の上には『平和が一番』と書かれていた。あれはクラスが心がけることである。

それを考えたのはこのクラスの担任であるが、誰も気にしていない。

「きりーつ。」

「礼。」

『お願いします。』

「はい、お願いしますね。」

天馬（ペガサス）先生はダルそうにそう言った。

「はぁいじゃあ、『運に見放された転生者』の一話を開いて。今日の授業では、主人公について解説するぞ。」

「えー誰かこの主人公について分る奴いるか？」

天馬（ペガサス）先生は黒板に『一馬（ユニコーン）』と書いた。

「ハイ、先生！」

「どうぞ、高町さん。」

グルグル目の眼鏡をかけた高町なのはが立ち上がった。

「風間君がナルシストでウザいです。後、黒板が見えません。」

「おい、ナルシ。その性格なおして来いって先週の金曜日に言っただろう。死んで生まれ変われよ」

「無理です先生。」

「なら、死ね。生まれ変わるな。その方がこの世の為だ。」

「訴えますよ。先生。」

「えー授業に戻るぞ。」

「先生!!」

「どうぞ、フェイトさん。」

「隣に座っているアリシア姉さんが、早弁しています。しかも、タコサンウィンナーをこれみよがしに見せつけてきます。」

「先生。これは早弁じゃありません。そこに弁当があったからいけないんです。」

「全く意味が分かりません。自分の国に帰ってください。ていうか早よ帰れ!!」

「今度こそ授業を始めるぞ。」

「先生!!」

「どうぞ、バーニングさん。」

「だ・か・ら・私の名前はバ・ニ・ン・グ・スって何かい言わせれば気が済むんですか先生!!　訴えますよ。」

「それは、お前バニングスよりバーニングって言いやすいからだ。」

「訴えますよ。先生。」

「じゃあ、授業を進めるぞ。」

「はい、先生!!」

「どうぞ、月村さん。」

「私と付き合ってください。」

「分りましたよ月村さん。明日病院に付き合ってあげますから」

「先生。私はマジで言ってるんですよ。」

「明日一緒に行く病院は、精神科が良いですね。」

「ううぅ。」

「それでは、授業を再開するぞ。」

「はい、先生!!」

「何ですか、八神さん?」

「今からうちの胸揉んでくれへん?」

「明日月村さんと一緒に精神科の病院に行きましょうね。」

「そ、そんな〜」

キーンコーンカーンコーン!!　チャイムが鳴った。

「えー　今言ったことは全てテストに出るぞ。ちゃんとノートに取っておけよ以上。」

「きりーつ」

「礼」

『ありがとうございました。』

「ほいじゃ、明日。」

「私、転校しよう。」

星香が立ち上がってそう言った。

外伝第一項　3年Z（ずぃ～）組　天馬（ペガサス）先生（後書き）

3年Z組（ペガサス）天馬先生は時々、更新します。

第十五話　一馬（ユニコーン）のやってしまった（前書き）

更新です。

第十五話　一馬（ユニコーン）のやってしまった

決闘から翌日。

いつも通りに家を出て、いつも通りの時間帯に教室に着いた。あの腐っている奴は……居やがった。
しかも俺の方をにらみつけてきやがる。

アイツ、マジで面倒な奴だな。

なのは達が嫌うのも分る。アイツはマジで腐ってやがる。特に内面が酷すぎる。
あれで、内面も良かったらなのは達も好意を寄せていたかもしれないがな……マジでドンマイだろ、アイツ。

昨日帰ってすぐに飯を食べて、風呂入って寝たから今日は全く眠くない。居眠り出来ない。
あおれと、昨日の決闘の後、星香とは今日の朝まで全く会話を交わしていない。俺が話そうと思っても、星香の方が避けてくる。

あのクソ野郎のせいで、星香に無視される羽目になっただろうが……ああ、マジでついてねえな俺。

今日は魔導士組は全員居た。

「一君が起きてる？」

それが、お隣さんの魔王様の第一声だった。
酷いな、俺だって何時も学校に来た瞬間に寝ているわけじゃ人だからな。

「まるで、何時も俺が寝ているような言い振りじゃないか？」

「実際、そうでしょうが。」

バーニングさんとエンカウントした。

「何を言うバーニング。俺は何時も真面目に睡眠学習をしている。」

「それを、居眠りって言うのよ。その前に、何度言ったら分るの！！　バ・ニ・ン・グ・ス・よ。」

「はいはい、バーニングさん。」

「ぬぐぐぐぐ、何時か絶対に名前で呼ばせてやるんだからねぇぇぇぇ！！！」

捨て台詞を吐いて、すずかの方に走って行った。そうか、嫁に慰めてもらうのか……良いな嫁。俺も欲しいな。

「ねえ、一君？　何でアリサちゃんの事、ちゃんと呼んであげないの？」

「う～ん。教えても良いんだが、内緒だ。」

「えええええ！！」

「秘密が多い男はミステリアスで良いだろう。」

「そういうものなのかな？」

「そういうものなの。」

ガラガラっと教室のドアが開かれて、我らの担任が入ってきた……違う、誰だあれは？　見た事の無い先生だぞ。

教室中がザワザワし始めた。

「ええ、今日は、担任が出張で居ないので代わりに副担任の私が来ました。」

ビールッ腹の頭の毛が寒い男の中年の先生だ。こんな先生いたかな。まあ、良いか。

「出席を取りますね。休みは居ませんか？」

生徒を見回す先生。

「全員居ますね。私はこの後やらなければいけない事がありますので、好きなようにしていてください。」

生徒たちが一斉に『イェーイ！！！』って言おうとした瞬間。

「しかし、騒がない様にしてくださいね。以上です。」

そう言い残して、先生は教室を出た。居るんだな、ああいうテキトウな先生も……頭の毛も適当だったけどな。

隣のクラスに迷惑にならない声の大きさでクラスの奴らは談笑をしていった。そんなこんなで朝のＨＲらしきものはチャイムによって終わりを告げた。

授業が進み授業と授業の合間の休憩時間になった。

寝れん！！　寝たくても寝れん！！！　どうすればいいんだ？！授業を聞いていても分るからつまらんし、寝ようと思っても眠れん。そうこうしているうちに１０分間の休憩時間が減っていく。こうなったら……久々にあれをやるか。

俺は立ち上がった。

「一君、どうしたん？」

はやてが俺に気づいた。

「俺にはやらなければならない事がある。」

「？？？」

「はやてには、まだ分らんだろ。」

俺は颯爽と教室から抜けて、階段を上がっていく。

屋上に着いた。ここの学校は緩い。
大抵の学校は屋上に行くのは禁止されているが、此処はされていない。しかも、１０分間の休憩時間に屋上に来ようと思うアホは居ない。

だから、誰も居ない。だから練習が出来るんだ！！！

俺は両足を肩幅まで広げ、腰を落とした。

両手は右腰の辺りに持って行き、そして両手で何かを包み込むような感じにする。

息をしっかり吸う。

さあ、行くぞ！！！！！

「か～め～」

分るぞ。気が集まってくる。

「は～め～」

来た来た来たあぁぁぁぁぁあ！！！！！

「波アアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

「ふぅ～やりきったぜ。」

額の汗を拭う。しかし、今日もかめはめ波を放てなかった。

「だが、もっとこうか？」

「か～～～～め～～～～～～～」

「は～～～～～め～～～～～～」

「波アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！」

やっぱり、何も出ない。クソ！！　気が集まったはずなのに、まだ足りないのか。

「一君……何をやっとるん？」

はやてに俺の秘密がばれてしまった。

「何言ってんのはやて。俺、何もやってねえし。只腰を落としていただけだし。」

「いや、でも今、かめはめ波の練習」

「してねえし、俺がするわけねえし。」

「え、でも。」

「俺が少年みたいな事をすると思ってんの、はやて？」

徐にはやてがうちポケットに手を突っ込んで、そこから携帯電話を取り出した。うん？　何がしたいんだ。

『か～め～』

『は～め～』

『波アアアアアアアアアアアアアア！！！！！！』

『ふぅ～やりきたぜ』

『だが、もっとこうか？』

『か～～～～め～～～～～～』

『は～～～～～め～～～～～～』

『波アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

俺の声だ。

「これでも、嘘をつくんか？」

してやったりという顔をしやがって

「参りました。」

無い胸を張るはやて。

「いま、いらん事を考えへんかった？」

「滅相もございません。」

「うちな、今日翠屋のシュークリームを食べたいって思ってるんや。」

「奢らせていただきます。」

「え？！　良いんか？　悪いな～一君。」

「そんな事は無いですよはやて様。」

「なら、家族のも買って帰りたいんやけどな～」

「ご家族のも奢らせていただきます。」

「お、悪いな～一君。」

はやてに弱みを握られてしまった。ああ、どうなるんだこれからの

俺の学校生活。

途方に暮れ、顔を両手で覆い隠し絶望に浸る。ああ、今日は星香のご機嫌をとる為に翠屋にいって、奮発して少し値段の張る星香の大好きな、イチゴのタルトとイチゴの生クリームケーキ買って帰ってやろうと思ったのに……スマン。

「冗談や。一君。」

「え？！」

「冗談やって一君。うちがそんな事するわけないやろ。（ホンマはマジでそうしてもらおうと考えとったんやけど、あの顔を見たら出来るわけが無い。）」

一君の表情が一気に明るくなった。うっ！！　うちは何て卑怯な事を考えとったんや。

「だ、だからな。このデータは今から削除するからな。それにこの事は誰にも言わんよ。」

「はやて～恩に着る。」

「な！？」

いきなり両手を握られた。うちは顔に血が急上昇してくるのが分か

った。
ああ、うち今、凄く顔を真っ赤にしてるやろう。
いきなりなんて卑怯やで、一君。

「そうだ。はやて、今日の放課後一緒に翠屋に行かないか？」

「一君。うちは冗談って言ったやろ。」

「まあ、そうなんだが……俺は元々翠屋に寄って帰るつもりだったし、はやてには秘密にしておいてくれるって言ったし、そのお礼でなんか奢るよ。」

「ホンマに良いんか？！」

なのはちゃん、アリサちゃん。何か抜け駆けみたいな感じでゴメン。せやけど、折角のチャンスなんや！！　うちは頑張るで！！！

はやては気合を入れた。

一方、一馬の心情は……金大丈夫かな、星香に買って帰る金あるよな。不安だ……まあ、偶には良いかなこういうの。

第十五話　一馬（ユニコーン）のやってしまった（後書き）

次回は翠屋にはやてと一緒に行く一馬（ユニコーン）。しかし、その後ろを着けてくる怪しい影。

次回『一馬（ユニコーン）とはやてと翠屋。そして影たち』

第十六話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋　その１（前書き）

更新です。

今日から水曜日まで多分、更新できないと思います。

友達が我が家に泊りに来るので、二泊三日ほどですが、次の更新日は多分木曜日の０時ごろになるのではないかと思います。

第十六話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋　その1

はやてに秘密がばれた放課後。

俺ははやてに襟首を掴まれて、引きずられるように男子トイレを後にした。はやて、小便をしている時に男子トイレに入ってくるもんじゃありません。しかも堂々と入ってきましたよね。

俺の息子を見たら、どうするおつもりだったんですか?!

俺のそんな意見も虚しくスルーされた。酷くない、俺のプライバシーあったもんじゃないよ。

泣けてきたよ全くもう。

教室を去る時に、あのクソナルシストが俺の事を睨みつけていた…。何なんだよ一体?!　どうしてこうなるの?　全く運がねえよな俺って奴は……カッコイイ感じに言ってみました。

そして、俺は引きずられるように下駄箱まで行き、下校した。

ずっとはやてに引きずられています。そろそろ背中が痛いです。はい。

しかも、制服に全く傷が入っていません……はやてさん、一体どうやっているの?

あいつの気持ちが分るな。連れられて行かれる気持ちが……

「ドナドナドナドナ子牛を乗せてドナドナドナドナドナ荷馬車がゆれる〜」

「何で、ドナドナ歌っとるん？」

「いや〜連れて行かれる子牛の気持ちが何となく分っただけだ。」

「そうか、そら良かったな。」

そうして、引きずられていく〜

はやては、ずっとを顔を赤くしていた。しかも、一馬（ユニコーン）と一緒に翠屋に行くと約束した瞬間からだ。

その為、恥ずかしくなって愛情表現の裏返しで一馬（ユニコーン）を引きずるという形になってしまった。はやても可愛い娘である。

この事がヴォルケンズに見られていたら、ある意味一馬（ユニコーン）の寿命が縮むであろう。

「なあ、何時まで引きずる気だ。」

ゴツンッ！！　急に手を放したために、重力にそって俺の後頭部が

コンクリートにクリーンヒット、大きなタンコブが出来てしまった。
すっごく痛いです。涙が出そうです。

「は！！　ご、ゴメンな。」

「良いよ。良いよ。」

ああ、痛い。血でてないかな？　タンコブの位置に手をやってみた
……ベトーッとしていた……

「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁぁあ！」

「ど、どうしたん？！」

「は、はやて見てくれ。」

はやてに俺の手を見せた。

「犬の糞がついてた。」

「何でや！！」

また、後頭部に強烈な痛み。おう、はやて。何時の間にハリセンを
出して一発シバかれた。
あ、糞が付いた。

「ああ、もう最悪や。」

「ドンマイ、はやて。ｇｏｏｄ･ｊｏｂだ！！」

今日一番の良い笑顔の俺。

糞が付いた手で、はやての肩を掴み。もう片方の手で親指を立てた。

「何しとんねん！！！」

「ヘブシ！！！！！」

紙とは思えない威力。音も少し鈍い音だった。

顔面にハリセンが直撃。しかも、鉄で作られたハリセンだ……普通に考えて、それは人にやってはいけないだろう。はやての腰の入ったホームラン打ちが見事にクリーンヒットした。

物凄く痛い。鼻が折れ曲がったかも。

あ、ヤバイ……意識が……とおく……な……っていく……

はやてが最後に何かを言っていたが、そんな言葉は頭に全く入っていなかった。

ああ、お花畑が見えるよ。

あ、曾おじいちゃん。今からそっちに行くね。

バイバイ星香……間違っても、俺の死体を食べないようにね。君ならやりかねないから……じゃあ、みんなまた来世で会おう。

こうして一馬（ユニコーン）は旅立っていった。

「な訳あるかぁぁぁぁぁあ！！！！」

「わあぁぁ！！

目と鼻の先にはやての顔があったが、知るか！！　うん？　目と鼻の先にはやての顔……

一旦状況整理しようか。

俺ははやての渾身の一撃を喰らって気絶する。

多分はやてが俺を運ぶ（魔力を行使しないと、俺は運べんだろう。俺、デカいし。）。

そして、ベンチに座って俺に対して膝枕。

俺が大声をあげて起きると、そこにははやての顔。

男にとって、最高の事なんだろうけど……どうしてこうなった？

一方、その様子をじっくり観察していた人物が数名ほどいた。

「はやてちゃん酷いよ。抜け駆けなんて！！」

魔王様の握力だけで、大木がメキッと悲鳴を上げた。

「ふふふふ、はやて。覚悟は出来てるんでしょうね。」

こちらの方は、電柱がに蜘蛛の巣のような罅が入った。

このお二人さんから、凶悪な真っ黒のオーラが出て、生物という生物が一切近づこうとはしない。

「アリシア姉さん！！」

「フェイト！！」

二人は恐怖のあまり、抱き合う。

「はやてちゃん、ゴメン。私にはなのはちゃんとアリサちゃんを止めることが出来なかったよ。」

明日、はやての命が消えない事を祈るすずかであった。

第十六話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋　その１（後書き）

いや～嫉妬って怖いですね。

はやての風前の灯ですね（笑）

第十七話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その２（前書き）

更新です。

お泊り会楽しかったですよ。夜まで騒いで徹夜になってしまいましたけどね。

第十七話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その2

なのはとアリサが真っ黒なオーラを大放出していたその頃、一馬（ユニコーン）の方では……

「!?」

突然、膝枕をしていたはやての体が震えた。

「？　どうしたんだい　へへいへいへい。」

「そこで、忌野清志郎さんの『雨上がりの夜空に』が出てくるんや。」

「ハリセン無の的確なツッコミをありがとう。まあ……」

ちょっとした間を作る俺。

「ゴクリ。」

はやて、口に出さなくても雰囲気で分るよ。

「……何となくだ。」

「何となく？　……」

「あ、そうだが……」

一瞬の沈黙。

「一々、その間が紛らわしいんや！！！！！」

「オブチ！！」

顔面にハリセンアタック！！　鉄製じゃなくて紙製だったおかげでそこまで痛くは無かったが、顔面の表面が痛い。物凄く痛いです、はい。骨に来る痛みじゃなくて、ヒリヒリする痛みです。

「あ！　ゴメンな。ついやってもうた。」

「大丈夫。」

顔を手で押さえながら言葉を発した為、言葉全体が濁った様に聞こえた。

「にしても、ホンマに器用な細工をしたんやな。」

「うん？　なんの事だ？」

「ここやここ。」

そういって、はやては俺が犬の糞を触れた手で肩を触ったところを指差した。普通なら黒茶色い物体が着いていないといけないのに、何もついていなかった。

「一体どうやったんや。感触は多分糞やったハズやで……まあ、うちは触ったことが無いから分らへんけど」

「まあ、あれは……ある意味一種のイタズラ道具だ。」

「イタズラ道具？」

はやての頭上に、はてなマークが浮いているのが見える。色は黄色だ。

「ああ、そうだ。どうやって作ったかは企業秘密だ。言ったら面白くない。」

「言われてみたら、そうやな。うちも似たような物持っとったら、誰にも言いたくないな。」

「だろ。」

「そうやな。」

二人で少しだけ笑った。

一方のなのは達は……

「はやてちゃん、抹消なの。」

なのはの傍にあった大木は悲鳴を上げて、中間部分から折れた。

「はやて、私は一君とあんなに笑いあったこと無いのに……ハヤテコロス。」

アリサの怒りのパンチが鉄柱に穴を開ける。

「「「ヒィィィィィィィ！！！！」」」

恐怖のあまり、お互いに抱き合うフェイト、アリシア、すずかなのであった。

「！！」

突然、はやてが体中を震わせた。その後、自分を抱くように両腕を回した。

「？」

「な、何でもないんや。」

不思議そうにしている俺にそう言った。

「まあ、はやてがそう言うなら良いけど。」

俺ははやてがしてくれていた膝枕起き上がり、ベンチから立って背伸びをした。その時に背骨がボキボキッと良い感じに鳴った。

はやての方を向いた。

「じゃあ、行くか？」

「そうやな。」

歩き出す俺の横にはやてが来て、並んで歩き始めた。

当然の事だが、後ろから例の五人が着いて行き始めた……一馬（ユニコーン）とはやては全く気付いていなかった。

歩く事約１０分。

翠屋の前まで着いた二人と尾行している五人（五人のうち二人ほどとてつもなく危ない人物が居る。）。

ドアを開けて中に入ると、客が来たことを知らせる綺麗な音が鳴った。翠屋に来るのは一週間振りかな……前に来ようと思ったけど、バーニングに捕まって大変な目にあって来れなかったんだよな。

「あ、一君来たんだ。」

「美由希さん、客に対してそれは無いっしょ。」

「そうだね……お！？　はやてちゃんも一緒なんだ。」

「こんにちわ、美由希さん。」

「こんにちわ、はやてちゃん。じゃあ、こっちに着いて来てね。」

俺とはやては美由希さんの後ろを着いていく。美由希さん店員さんがこんなんで良いのか？　まあ、俺だから気にしないけど、何時もの事だしね。

窓際のボックス席に座った。席順は俺の前にはやてが居る。

「一君は、いつも通りので良かったよね。」

「ええ、いつも通りので。」

「はやてちゃんは？」

「うちはな……オレンジジュースと、フルーツタルト一つで。」

「かしこまりました。」

そのまま厨房の方へ行く。この時間帯はやっぱり、中高生が多いな……特に女子。男子が居るとすれば、それはカップルだ。

桃色の空間作りやがって！！　リア充爆死しろ！！！！！　俺なんてリア充歴１５分だぞ、誰も勝てねえだろ。リア充歴１５分には……やべえ、泣けてきた。

このまま、平和な時間が続きますように。　嫌な予感がする俺には、そう願わずには居れなかった。

第十七話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その2（後書き）

一馬（ユニコーン）の願いは届くのか、次回を待て。

第十八話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その3（前書き）

更新です。

第十八話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その3

「そういやな、一君。」

「うん？　どした。」

美由希さんに注文して、すぐにはやてが声をかけてきた。何か聞きたいことがあるのか？　はやての口調はそう思わせた。

「翠屋の常連さんなんか？」

「ああ、勿論。ここ海鳴市に引っ越してから、この翠屋を知ってから、ずっと週に一回は絶対にここに来るほどの常連だよ。完全に習慣化になっているな。」

「そうなんか！　うちもな、ここの常連なんよ。」

嬉々とした口調で問いかけてくる。

「ふ～ん。」

どうでも良いような返事を返す。実際どうでも良くて、アニメを見ているから知っている。

「そうか。」

ちょっと落ち込むはやて。どうにかしないといけないな……背後か

ら猛烈な視線を感じるのだが、俺の気のせいか？　気のせいだと嬉しんだが。

カアー！　カアー！

カラスの鳴き声が聞こえた。カラスさんんんんんこのタイミングですか！！！！　せめて俺が何かを言おうとした瞬間にしてよ！！中途半端なタイミングだよ。

なぜか知らんが、感じていた視線がさらに強くなったのは俺の気のせいだと思いたい。

「お待たせいたしました。」

ｇｏｏｄｔｉｍｉｎｇだ美由希さん！！　俺は心の中でマイケル・ジャクソンのスリラーを踊ってしまったよ。ゾンビさんとタイラントさんが沢山居たよ。俺超怖かったよ。

「翠屋特製ブレンドコーヒーとシュークリームです。」

そういって、俺の目の前に置いてくる。うん、コーヒーの良い匂い。砂糖とガムシロップは入れないよ。だって、折角のコーヒーを殺してしまうからね。

「こちらが、オレンジジュースとフルーツタルトになります。」

はやての前に置く。はやての目が一瞬だけ、変わったのが見えた。
フルーツタルト大好きなのか？

「「いただきます。」」

これは絶対にしないといけない事だよ。食材に対する感謝の言葉だからね。
良い子のみんなはお兄さんの様にマネしようね。

先にコーヒーを一口。

うん。美味い！！　士郎さんいい仕事をする。

俺はこちらに顔をめ向けている士郎さんに気が付いた。

ｇｏｏｄｊｏｂ士郎さん。俺は腕を突きだして、親指を上げた。

士郎さんはそれに、ウィンクをして答えた。やっぱりあのクソナルシストのウィンクより士郎さんのウィンクの方が何十倍もカッコイイぜ。

俺も士郎さんみたいなカッコイイ大人になりたいな。

「なあ、一君？」

「何だね綾崎ハヤテ君」

「そうそう、うちもあの借金執事みたいに借金まみれに陥れられて大金持ちの金髪ペッタンコ幼女の執事になって。ハーレム築いて「ハーレム王」にうちはなるって高らかに宣言するんや。うち男ちゃうわ！！　ペッタンコちゃうわ！！　せめてイケメンのメイドになって、ハーレムエンドを迎えるんやぁぁぁぁぁぁあ！！！」

そう高らかに宣言するはやて。無駄に長く、面倒なノリツッコミごちそう様です。

そしてゴメンな、なんかゴメスだはやて。周りからとても痛い視線を受けているんだよ、しかもはやて中心に。

ホンマにゴメス。

はやて、少しは羞恥心という物を持て、端から見たら只の変態だぞ。俺も人の事言えねえがな。

その時、俺とはやては重大な事に全く気づいていなかった。俺とはやての隣に魔王ナノハン様と炎王バーニング様が座っていることを……え！？　どういう事デスカ。ダレデスカ、メイオウナーノハサマとエンテイバーニングサマッテ。

マジデスカ。

「はやて。」

「一君。」

俺とはやては万力で挟まれたような強力な力で肩を同時にガシッてされた。俺とはやては同時に変な汗をダラダラと滝のように流し始めた。

うん、俺の嫌な予感的中で良いのかな。しかも、何でお二人さんはそんなに真っ黒なオーラを放出しているのですかね。ハッキリと見えますよ、完全に具現化してますよ。真っ黒なオーラが、禍々しく。

某サーヴァントの某バーサーカーさんを殺気だけで１２回殺せそうなんですが、というか一瞬にして１２回殺せそうなんですが……初めて見たよ、士郎さんが顔を真っ青にしているところ。

うん？　士郎さん何？　何でこっちに向けて両手を合わせてるの？　まるで僕たちにご愁傷様って言いたげな感じだよ？　どういう事？　ねえ士郎さん！！！！！！　あ！？　待って奥に消えていかないで、待って士郎さん。助けて士郎さん。割とマジで助けて士郎さんんんんんんん！！！！！

俺の全力でやった人生の中で最高の手話を士郎さんは全く読み取れなかったようだ。

クソなんで俺は手話なんかしたんだ!!　せめて口ぱくで言えばよかった。そうすれば士郎さんの全銀河史上最強最悪最恐狂人戦闘民族長万能能力なら読唇術位会得している筈だ、なのに俺は人生の選択肢を誤った。

そして、その血を存分に受け継いでいる魔王ナノハン様はもっと怖いよおぉぉおお!!

シュバン!!　カツン!!　と目の前を細い何かが通り過ぎて、テーブルに何かが突き刺さった。頬から何か生温かい液体らしいものが流れているのですが、僕の感覚がマヒしているだけですね。そうですよねぇぇぇえ!!!!!

テーブルには爪楊枝が突き刺さって貫通していた。へぇ～爪楊枝ってテーブルを貫通させる事が出来るんだ。初めて知ったよ、曾おじいちゃん。

今度星香にも教えてあげよう。

爪楊枝ってテーブルを貫通するんだよって、そうしたら星香は絶対に毎朝俺を起こすために俺の腹に爪楊枝をベッドごと貫通させるという荒業を完成させるだろうな。

「ねえ、はやて。」

「あ、あああああああ。」

「どうして、そんなに脅えているのかしらね。ねえ、はやて。」

「あああ、あああああああああああ！！！！」

「そう、話せないのね。」

「い、いや、あああああああああああ」

「どうして一君と一緒に居たのかしらね。まあ、話せないのなら仕方ないわね。ＯＳＨＩＯＫＩしようかしら。」

はやてがこちらを向いて、『ヘルペスミー』の視線を送った。はやてそれを言うんだったら『ヘルプミーな』だが、俺の方を見て直ぐに血の気が引いて真っ青に染まった。

それもそうだよな。俺の方はそちらより危険な、

「一君。楽しい楽しいＯＨＡＮＡＳＨＩしようね。」

魔王ナノハン様からランクアップした冥王ナーノハ様だからな。

お？！　フェイトにアリシアにすずかじゃないか。それより脅えす

ぎだろ、冥王ナーノハ様が隣に居る俺よりマシだろ。絶対そうだろ。
あんた等冥王ナーノハ様と炎帝バーニング様の友達だろ。助けてくれよ。

おい！！　真っ青な顔を全力で左右に振るなよ。倒れるぞ。

どうしてこうなった。ああ、今日も運がねえな俺。
もう、諦めるしかねえだろコレ。

星香スマン。今日星香の大好きな物買って帰れないかもしれん。

第十八話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その3（後書き）

ああ、やってしまった。

なのはとアリサがヤンデレになってしまった。どうしようか、困ったぞ。

第十九話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その４（前書き）

この話もこれで終了です。

後、１月１日まで更新無いかと思います。

今正月スペシャルの番外編を書いていますので、何を書いているのかはまだ秘密です。

ヒントはアレです。尻がアレされてアレになるアレです。

第十九話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その４

冥王ナーノハ様と炎帝バーニング様のＯＳＨＩＯＫＩ＆ａｍｐ；ＯＨＡＮＡＳＨＩが無事（？）終わって全員集合。

俺とはやては肩身の狭い思いをしている。人間という原型を留めていてマジで良かった！！　生きてるって素晴らしい～～！！！！！

今現在は冥王ナーノハ様と炎帝バーニング様は落ち着いて、普通の高町なのはとアリサ・バニングスに戻ってくれた。マジで良かった。これで一安心です。はい。

それぞれが好きな物を注文して。目の前でガールズトークを繰り広げているなのは達。

非常に肩身が狭いです。何度もいうようですが肩身が非常に狭いです。

なので俺は、士郎さんの所に行きました。というか、追い出されました。目の前で士郎さんがコーヒー豆をひいている。

良い香りがする。

俺も家でコーヒー豆を買って自分でコーヒー豆をひいて作っているんだが、翠屋程うまく出来ない。

偶に、士郎さんにコーヒーの淹れ方を教えてもらっている。そのおかげで、大分うまくなって、父さんも母さんも俺の入れたコーヒーが好きになってくれた。

星香はカフェオレの方が好きのようだ。

「ねえ、士郎さん。」

「何かね、一君。」

「何で、あんなに怖いんですか。貴女の末っ子さんは！」

俺はついついカウンターを叩いた。

「あー、それは僕にも分らないな。何時の間にかというか、さっき初めて知ったよ。」

「ああー士郎さんでも分らないか。」

「すまないね、一君。」

「良いですよ、気にしないでください。」

お替りしたコーヒーを一口飲む。うん、ヤッパリ何回飲んでも美味いもんは美味い。

「にしても、一君は何時見てもデカいね。」

「ヤッパリそうですよね。まだ中二なのに、１８０ｃｍ越えってデカいですよね。」

「デカいってレベルじゃないよ。デカすぎるってレベルだよ。」

「ヤッパリそうか。それにまだ身長伸びてるらしいんですよ。」

「そ、そうか。」

苦笑いをする士郎さん。

「２ｍ越えしますかね。」

「このまま行くとするだろうね……確実に。」

「いらねえよ、２ｍの身長なんて……士郎さん要ります？」

「僕は、このぐらいで十分だよ。」

「ですよね～」

士郎さん全体のバランスが丁度良い。それは素人目から見ても分る。良いな、もう４０代ぐらいなのに体型を維持していて、更に見た目が２０代に見えるって何なんですか？　高町家ってそういう家系何ですか？　ていうか、俺の母さんもそうだよな。

そういえば、よくよく考えてみると『リリカルなのは』に出てくる奥様方って全員若いよな。絶対そうだよな、桃子さんとかリンディさんとかプレシアさんとか……マジで何なの？！　全員サイヤ人なの？　そうでしょ。絶対そうでしょ！！！！！

何か無性に溜め息を出したくなった。

「はぁ～」

「どうしたんだい、一君。突然溜め息なんてついて。」

「いや、何でも無いです。」

「そうか。」

ズズっとコーヒーを一口飲む。

あ、眼鏡が曇った。俺は眼鏡ケースを取り出して、そこから眼鏡拭きをとってレンズを拭く。よしキレイになった。

「一君が使っている眼鏡って、美由希が使っている眼鏡と一緒の所だったよね。」

「そ、そうでしたね。」

何か三つほど、強烈な視線を感じるのですが……なのはさんとバーニングさんとはやてさんからだろう。いや確実にそうだろう。視線で人を殺せそうなんですが、ほら士郎さん。貴男もミスったっていう顔をしてるじゃないですか?!

「話題変えましょうか、士郎さん。」

「そ、そうだね。一君。」

露骨に話題チェンジをする俺と士郎さん。
このままの話題で話を続けたら、殺されてしまう。

「あ?!　そういえば。」

「うん、どうしたんですか?　士郎さん。」

「今、美麗さんと麗司君は居るかい。」

「父さんと母さんですか。」

「そうだよ。」

「今は二人して、海外旅行に行ってますよ。帰ってくるのは今週の金曜日辺りですから、明後日ですね。」

俺の言葉を聞いて、腕を組んで唸りだす。

どうしたんだろう士郎さん?　腕なんか組んで、トイレに行きたいんだったら行けばいいのに。

「今、変な事を考えなかったかい一君。」

「いや、そんなことないですよ。」

「そうか。」

流石俺のポーカーフェイス。星香と一緒に暮らしていたら、何時の間にかプロ顔負けのポーカーフェイスを手に入れていたんだ。

「それで、どうかしたんですか士郎さん？」

「いや、それがね。桃子がね、美麗さんと一緒に海鳴市に住んでいる仲の良い奥様方とお話会みたいな事をしたいって言っていたんだ。もし、家に居たら電話をして伝えようと思ったんだけど。」

「それなら、俺が伝えておきますよ。」

「そうか、助かるよ。よろしく頼むね。後麗司君に今度一緒に飲みに行こうって伝えてくれないか。」

「了解です。」

俺はコーヒーの最後の一口を飲んだ。

「士郎さん。イチゴのタルトとイチゴの生クリームケーキをワンホールずつで、お持ち帰りでお願いします。」

「お？！　珍しいね。一君がこの二つを買って帰るのは、もしかして、お姫様に何かあったのかね。」

「そのようなもんです。」

一応、高町家のなのは以外は星香の存在を知っていてもらって、な

のはには秘密にしてもらっています。
まあ、当然だが、なのはに知られると面倒な事になりそうだからだ。

「お、そういう事は、あの子と一つ屋根下なのか？」

「そうなりますね。」

ゾクッ！！！！！　何ですかこの悪寒は！！　全身の鳥肌が立ちました。
寒気が止まりません。士郎さんも感じ取って臨戦態勢になってますよ。あ、美由希さんも臨戦態勢になってますね。何時でも攻撃可能な体勢です。

でもね、貴方達が構えている相手は……貴男の末っ子さんとその末っ子さんのお友達二名なんですよ。
ここまで言えば分りますよね。

なのはとはやてとアリサですよ。

鬼のような形相で見てるんですよ。

ねえ、何時になったら俺の平穏が訪れるんですかね。

この後、何があったってそりゃあ、星香のお土産は買って帰ったよ。

でもね、はやてのは奢るって約束だったけど、なのはとアリサのも奢られたよ。助かったのはフェイトとアリシアとすずかは遠慮してくれたのは助かった。

今ので樋口さんが一枚飛んだよ。

もう財布の中が氷河期だよ。残り残金、９４円……九死……縁起が悪いな。

これで更に悪い事が起こりませんように、世の中ってそう上手くいかないよね。それが常だよね。

「一君。今から一君の家に泊まりに行くね。」

「は?!」

なのはさん一体何を言っているのですか？　僕には何を言っているのかがわかりません。

「うちも泊りに行くで。」

「Ｗｈｙ?」

はやてさんもデスカ。

「私も泊りに行くわよ。」

「ソウデスカ。アナタタチハ？」

俺はフェイトと、アリシアとすずかに聞いた。

「私は止めとく。いきなりそんな事をしたら、一君に悪いし。」

良い子や、すずかはマジで良い子や。なのはやバーニングやらはやてには見習ってほしいものだね。

うん、冗談だよ。なのは、アリサ、はやて。君たちもとても良い子だよ。この世に居ない位の良い子だよ。

「私たちも止めとくね。」

「そうだね、フェイト。それに何となく怖いし、殺されたくないもんね。」

「「う、うん。」」

それがあんた等の本音かい！！

なあ、コレって絶対ヤバイよな。特に俺の命が……メッチャ危機感を感じるんだが、ヤバイ。俺死んだかも。

変な視線もあるしな。

シスコンという名の緯線を感じる。なのは達が放った視線より強烈なんですがね。

もう嫌！！！！！

コレって、風前の灯っていうやつか。明日の朝日が拝めますように、

いや割とマジで……

マジでついてねえな～俺って奴は……

第十九話　一馬（ユニコーン）とはやて、そして翠屋その４（後書き）

次回お泊り会です。
ですけど、先に番番外編が終わってから投稿しますね。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時プロローグ（前書き）

更新です。

アレです。今現在進行形で見ています。

そして、新年あけましておめでとうございます。

今年もよろしくお願いします。

注：これは本編に関係ありません。ご都合主義も入っているかも？

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時プロローグ

「んん……うん？」

何時もと違う不思議な違和感を感じとり一馬（ユニコーン）が目を覚ました。

そして、一言……

「知らない天井だな。」

彼の人生で一度も見た事の無い天井があった……多分そうであり、今後は無いであろう。

「やっと起きたか。」

「？！」

ある意味一番聞きたくない声が聞こえた。だが、直ぐに冷静になって考えてみれば簡単に分る事だ。

彼は俺に恨みがある筈だ。

「お前の仕業か。」

一馬（ユニコーン）は隣で佇んでいる風間恭仁を睨みつけた。

「知らねえよ。こんな事をするんだったら、テメエと同じ部屋に居らねえよ。つうか、お前が俺を拉致ったんじゃねえのかよ。」

「は！　誰がクソナルシストを好きで拉致らなぁいけないんだ。」

二人の間で火花が飛び散る。
だが、すぐに二人の戦意は消沈した。

「おい、気づいたか。」

「何が？」

俺はクソナルシの声なんて聴きたくねえんだよ。

「魔力が封じられて、魔法が使えねえ。さらにデバイスまで取り上げられてやがる。」

「おいおい、冗談じゃねえぞ。此処が凶悪犯罪者のアジトだったらどうするんだよ。」

「簡単だ。マイエンジェル達の助けを待つ。」

ああ、もうコイツ末期だ。完全にイカレテやがる。
誰かコイツの脳を取り換えてくれ、なんかコイツが可哀想だ。主にこんなふざけた脳に使われている体がな。

まあ、今は争い合っている場合じゃないよな。多分それはアイツの方も分かっている筈だ……俺よりも。

「おい、知っていることを話してくれ。このままじゃ何も分らん。」

「話したいのも山々なんだが、俺も気づいたらこの部屋に寝かされていたからな。」

使えねえナルシだ。

もう一度部屋を見回して確認する一馬（ユニコーン）。

それほど広くない正方形の部屋。外と繋がっているドアはビクともしない、どんだけ頑丈なんだよ。そう思いながら窓の方を見ると、鉄格子がかかっており脱出は不可能だ。

「ん？」

もう一度よく目を凝らして見てみると、壁と同系色のドアを発見した。見分けが殆どつかないほど精巧に作られている。

俺の変化に気づいたのか、クソナルシが近づく。

「何かあったのか？」

「あれを見ろ。」

仕方ねえから教えてやった。こういう奴ほど、隠すと無駄にしつこいからな。こういう時は素直に教えてやった方が良いのさ。

「ドアだと。」

「ああ、そうさ。さて、どっちから先に入る？」

「そりゃあ、お前から先に入れよ。」

「良いぞ。」

「ありゃ？！」

何かズッコケたナルシ。まあ、放っておこう。
俺はドアノブに手をかけて、捻りドアを開けて中に入った。

そこには信じ難い光景が広がっていた。

星香。なのは。フェイト。はやて。アリシア。アリサ。すずかが居た。

しかも、全員が起きていて、トランプをしていた。

「てぉぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

皆さんがビクッてしたのが分ったが、無視だ。

「アンタラ何してんの！！！　何処かもわからないところでトランプってしかも、ダウトォォォォオオ。ダウトをやっているお前ら完全にダウトォォオオオ！！　頭オカシイの、何修学旅行気分なの。ねえ、アンタラ何？　危機感ってものが無いの！！」

「い、いや～トランプがあったらまず先にダウトに走るやろ。」

「そこは、もっと捻ってスピードだろぉぉぉおおお！！！！！」

ねえ、何で皆さんは『何言ってんの、トランプと言えばダウトでしょう』て言う顔は、何、俺が間違ってんの。ねえ。

「おお、愛しのマイエンジェルたち。」

何ともいえないタイミングで風間恭仁（クソナルシスト）が入って来た。

あ、皆さんの顔が引き攣ったね。特に星香なんて一瞬して無表情に変わったよ、感情が一瞬にして亡くなったよ。
そういえば星香はクソナルシの事、滅茶苦茶嫌っていたよな。
みんなもそうだけど、可哀想にな。

ああ、なんかクソ面倒臭い事に巻き込まれたような気がするな。

これから何もありませんように。割とガチで……

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時プロローグ（後書き）

マズは一部です。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時１（前書き）

色々とツッコミたいことは沢山あると思いますが、番外編なので気にしないでください

「ホンマやな、ホンマに魔力行使が出来ひんな。」

「うん、それにデバイスまでもが無いし。」

腕を組むなのはに、フェイトは常に持ち歩いていたアースラへの通信機を取り出して操作をしているが、期待は出来そうにない。

「アリサちゃん。ダウト。」

「ぶっぶー。ハズレよすずか。」

「くっそー、アリサちゃん強いよ。」

「そうよね、アリサは強いよね。何ていうかポーカーフェイスがうまい。」

「ふふん！！　貴方達は、すぐに顔に出るのよ。」

三人は未だにダウトをしていた。

「お前らぁぁぁぁぁあ！！　こんな緊急事態に何時までダウトしてんの。ねえここから抜け出したくないの、そんなにダウトしたいの。なら勝手にダウトしとけぉぉぉぉぉおおお！！！　お前ら完全にダウトぉぉぉぉおおお！！！！」

もう、お前らがずっとダウトしてるから、間違えてクソナルシの服全部破ってしまったよ。ｈａｈａｈａｈａ

「おい、てめえ、何やってんだ！！」

「おいおい、変態。俺に触れるな、変態が映って最低の変態になっちまうよ。」

ぶっとい糸が切れる様な音が聞こえた。切れたかコイツ。

「ぶっ殺してやる。」

そうクソナルシが言った瞬間、部屋の温度が急激に下がりまるで寒気だ。

「誰が誰をぶっ殺すって、貴男は何をするつもりですか？　ユー君を殺す気ですか？」

ヤバイで、マジで星香が切れてるよ。なのは達も震えてるよ。冥王ナーノハ様状態より恐ろしく恐いのですが、星香が。

「元々、私は彼方の事が気に食わなかったんですよ。死んで欲しいんですよ、てか死んでください。」

一歩一歩と星香がクソナルシに近づいていく。ああ、脅えてるよアイツ。

ご愁傷様です。

今回だけはてめえを同情してやるよ。割とガチで……

「ヤ、ヤメ……」

「嫌です。」

笑顔で否定された。

ドガドガって非常に痛そうな音が聞こえる。こりゃあ骨に沁みる殴り方だな。

「カオハヤメテ！　カオハヤメテ！」

「なら、コッチデス。」

「ダメー！　ソッチモダメー！　コカンダメ！！」

「フフフフ！！　イヤデス。」

「ヒギィィィィィィイイ！！！！」

拳という名の鉄槌が振り下ろされて、風間は豚のような鳴き声を出した。

俺は股間を両手で押さえていた。ああ、痛みが伝わってきそうだ。

何かムズムズし始めたよ。

なのは達はというと、ああ、ヤッパリ……良い顔してる。スッキリした表情だよ。

「お、おい。星香その位にしといてやれ、風間の奴がジャガイモみたいになってるぞ。」

「分りました。ユー君が言うならば、止めます。」

だが、完全に風間の奴は気絶していた。何か同情するわ、コイツに対して同情するなんて思わなかったよ。今回ばかりは同情してやるよ。同じ男として……アイツの生殖能力失われたか？　グチャッていう音がやけにハッキリと聞こえたからな。

「ｎｉｃｅよ星香。」

「ホンマよ星香ちゃん。うちはスッキリしたで。」

「ありがとうね。星香ちゃん。」

「ユー君にあんな事を言った罰です。」

「「「うんうん。」」」

なのは、アリサ、はやては同時に頷く。

アリシアは動かなくなった風間の股間に、何処からか取り出したマジックハンドで突いている。コラ、止めてあげなさい。

いくら、アイツが死んで欲しいほどムカツク奴でもそれだけはやってはいけないよ。

じゃないとマジックハンドが汚れてしまうよ。

滑稽だな、トランクス一枚でしかも両手でコカンを押さえながら気絶しているんだからな、これを滑稽と言わずしてなんて言うんだ。

それから、時間が経った。時計が無いから、何時間経ったのか、今何時なのか全く分からない。

「ああ、ｍｙジュニアは生きているな。」

「回復早いな。」

「当然だ。俺だからな。」

あ、皆さんの目が一瞬にして冷たいものになったようだ。

「なあ、どうするよ？　ここから出れそうにも無いよな。」

「無理っぽいよ。アースラに全くつながらない。」

フェイトは手に持った通信機をプラプラさせた。

「無理やろうな。ここの壁がどういう材質で出来ているか分らんやけど、メッチャ硬いのはたしかやで、破壊は無理ちゃうんか。」

「そうか。」

「私達の携帯も全く繋がらないのよ。圏外みたいで。」

「分った。」

アリサ達の方も無理みたいだった。さて、どうしようか？　このまま助けを待つにも何があるか分らない。最低でも、女子たちだけでも助けないといけない。クソナルシを犠牲にしてでも……俺は意地でも助かる気満々で居るよ。

「にしても、テメエが女だったら俺のハーレムが完成していたのによ。」

『……』

物凄くヤバイ空気に変わった。

流石のこのクソナルシもこのヤバイ空気を読み取ったらしい。

「じょ、冗談だよ……マジにとるなって……」

「笑えねえ。全くもって笑えねえぞお前。目が若干本気だったぞ！！　おい！！！！！」

「うわ～無いわ。」

即行でアリサが部屋の隅まで逃げて行った。それにつられて、皆さん（若干一名ほどヤバイ笑みを浮かべていた。）も逃げた。露骨にクソナルシから距離を取った。

（私のユー君を取る気ですか、あの屑は……殺してあげましょうか？　ウフフフフ。）

非常にヤバイ笑みを浮かべている星香だった。

《ああ、君たち。ご機嫌はどうかね？》

『？！』

突然、モニターが目の前に開いてビックリする俺ら。

『キャアアアアア！！！』

なのは達は断末魔に近い悲鳴を上げた。俺ら男共は、

「「ぶぉふぉ！！！！！」」

噴いた。物凄い勢いで噴出した。

だって、モニターに映っている男は……

顔に女物のパンツを被って……

上半身裸で……

真っ白な白衣を着ていて……

ブリーフパンツを履いている……

変態という名のジェイルが映っていたんだ。

こんなのが、いきなり目の前にでたら噴くよね。

《今から君たちには、とあるところで２４時間過ごしてもらう。》

俺たちはポカンとしている。何言ってんだこの変態は？

《その中で、君たちに刺客を送った。》

その言葉を聞いて、警戒心を高めて、臨戦態勢に入る俺以外の皆さん。うん？　俺？　無理無理。戦闘できないし、痛いの嫌い。

まあ、次の一言で、色々とぶっ飛んだね。

《笑の刺客を送った。》

俺らは一瞬何を言われたのか分らなかった。いや、理解できなかった。

笑の刺客を送った……なぜ？

《君たちには今からゲームに参加してもらうんだ。》

「ゲームやて。」

《そうだよ。八神君。》

《今からとあるところで２４時間、とあるゲームに参加をしてもらう。》

何か、聞いたことのあるような気がするんだが、気のせいか。

《それこそ。》

あの笑ったら尻がアレされるあれじゃないよな。はやての顔を見ると、「まさか」ていう顔をしているよ。他のメンツもそれっぽい顔してる。

《さあ、始めようか！！！！！！！！！！》

《笑ってはいけない２４時。》

今、最悪のゲームの音が鳴った。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時１（後書き）

次回から本格的に行きます。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時２（前書き）

更新です。

今回は結構頑張りました。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時２

《さて、ルール説明をしようか。》

未だに脳内の処理が誰も追いついていない状態で勝手にルール説明を始めた変態（ジェイル）。

《一、君たちには今から、とある学校で２４時間学校生活をしてもらう。》

《一、何があっても笑ってはいけない。》

《一、笑ったものにはナンバーズによるキツイお仕置きがある。》

《一、支配人の命令には従う事。従わなければキツイお仕置きが待っている。》

《一、一番罰ゲームを受けた人は、最後にキッツイ罰ゲームがある。》

《以上の事を踏まえて頑張ってくれたまえ。案内人は送っておくよ。》

モニターは消えた。

「ふっざけんなよぉおぉおおお！！　何でいきなりこんな目にあってんだよ。何で、何でガキ使なんだよ。ふざけんなよ！！　あれは見て笑う番組であって、体験するもんじゃねえだろぉぉぉぉおおお！！！！　マジでふざけんなよ！！！！！！」

俺の叫び声が部屋に響いた。

ガチャっと今まで開かなかったドアが開かれた。其処から一人の女性が出てきた。

うん、何となく予想はしていたけど……ウーノさん。何してんですか。

マスクと分厚いサングラスをしたウーノさんが出てきた。

「ウーノさん、何してはるんですか？」

「そうですよ。ウーノさんがそんなだと、誰が一体ジェイルさんを止めるんですか！」

そうだぞ、はやてとなのはの言うとおりだ。

「ウーノ？　誰の事ですか？　私はワンです。」

「いや、ウーノさんでしょ。」

「ワンです。」

「いや、」

「ワンです。」

「い」

「ワンです。」

「はい。」

今まで以上の凄みのある言い方をされて、押し黙るフェイト。うん、そうだよね。無理だよね。

「なあ、ウーノさん。やっぱりジェイルが考えたのか？」

「私はワンです。まあ、そうです。ドクターがガキ使のあれを見て、『面白そうだから、やってみよう』という事で、始めました。やっぱり娯楽が必要なんですね。」

「ねえ、はやて？」

「どうしたん。アリサちゃん？」

「ジェイルさんって、最高峰の天才なのよね。」

「た……多分な……」

「……」

「……」

「あああああ！！」

とうとうはやてが頭を抱えだしてしまった。

「アリシアちゃんは、ジェイルさんの事良く知ってるよね。」

「う、うん。ま、母さんが研究者だから、その関係で知っているのは知っているんだけど、あんなんじゃ無かったよ。すずか。」

「そ、そうなんだ。」

「ユー君。」

服の袖を星香にクイクイッと引っ張られた。

「どうした？　星香。」

「何か、とても不安です。」

「ああ、俺もだ。」

ああ、不安で堪らない。このメンバーで大丈夫なのか？　大丈夫じゃないな……特にはやてが危ないような気がする。

「そろそろ良いですか？　私に着いてきてください。」

ウーノ後ろを小鳥が親鳥を着いていく様に、着いていった。

「後、先に言っておきますが、このドアの先に足を踏み入れたらスタートです。」

気を引き締めたのが分った。さて、どうなるかな？

ドアの先に足を踏み入れると、足元に魔方陣が出現した。

『は？！』

「それでは、皆さん。楽しんでください。」

『ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！』

俺らは何処かにワープした。

とある体育館。俺らはそこに居た。
気が付いたらこんな所に居たんだ。初めて見るところだ。

『それでは、今から校長先生のお話です。』

ウーノさんが司会をしている。

「なあ、テメエ。校長先生ってやっぱり。」

「そうだろうな。お前、アイツ意外に居ないだろ。」

『校長先生の入場です。』

「ねえ、一々校内放送する意味あるの？」

「無いんじゃないかな～アリサちゃん。」

『皆さーん静かにしてください。今から校長先生の入場曲が流れますよ。』

「は？！　入場曲。」

デーデデーデデー！

「こ、これは！？」

「ロ、ロッキーの曲。」

俺とクソナルシは直ぐに分った。

「ふん、甘いわね。こんな簡単なもので私が笑うわけないじゃない。」

ｒｏｃｋ　ｙｏｕ！

『ブハッ！！』

デデーン♪

『アリサ、はやて、一馬（ユニコーン）、風間、アウトー』

「ちょっとぉぉぉぉお！　何でいきなりＱｕｅｅｎなのよ。」

「あ、あかんで、マジで、ふふ。」

「おい、そこだけかよぉぉぉぉお！！」

「まさかの、切り替えだとは。」

「あああ！」

突然、なのはが叫んだ。

「どうしたの、なのは？！」

「アンディ・フグの入場曲」

『ブハ！！』

デデーン♪

『すずか、星香、フェイト、アリシア、アウトー』

「なのはちゃん！！」

「なんて事してくれたんですかなのはさん。」

「にゃははは、ゴメンね、みんな。お父さんがアンディ・フグ好きだったから、私も好きになっちゃって。」

「「はぁ～」」

頭を抱えるフェイトとアリシア。

校内放送と共にナンバーズが、手に竹刀をもって現れた。全員良い顔をしてる。

バチーン！！！

「いっだー！」

「ぐあああ！！」

鈍い叫び声を出す男達。

「いったあぁぁぁぁ！」

「あああああ！！」

「あうううううう！！」

「つあぁぁっぁあ！！」

「いっつぅぅぅぅぅう！！」

「いったあぁぁぁぁぁあい！！！」

「い、痛い。痛すぎる、俺痛いの嫌い。」

「アハハハハハ、貧弱だなテメエは、アハハハハハ……あっ」

デデーン♪

『風間、アウトー』

「お前、アホ丸出しだろ。」

「アホですね。」

俺と星香のアホ連呼。

「あ、アホやな。」

「いや、はやて。あれはアホじゃなくて、バカって言うのよ。」

「もう、どっちでも良いじゃん。アイツ、アホでバカで、ねー」

「そうだよね。アリシアちゃん。」

「本当にアホなの。」

「はあ～」

そして、頭をまた押さえるフェイト。

「先が思いやられるよ。」

バチーン！！

「ぐあぁぁぁああ！！」

『皆さん、静かに校長先生の話を聞きましょう。』

校内放送に従い、壇上に視線を向けると……

女性のパンツを被って、真っ白な純潔なブリーフを履いて上半身裸で白衣を羽織っている変態（ジェイル）が吊るされていた。

しかも白目をむいていた。

『ブハ！！』

デデーン♪

『全員、アウトー』

バチーン！！

『いったあぁぁぁああ！！』

「もう、一体何なのよ！！」

ごもっともです。アリサ。

「何で、あんな変な奴が最高峰の天才なのよ！！」

「おっしゃる通りです。」

「もう、何なのよ！！」

すると、吊るしていたロープが動きだしマイクの前まで持って行った。

「……」

涎が垂れた。

『校長先生は、失神しているので喋れんません。』

「何のために出てきたんだ?！」

デデーン♪

『なのは、アリサ、風間、アウトー』

「ちっくしょおおおぐあああああ！！」

叫んでる最中にバチコーンされた。

「もう、何のためにでてきたのよぉぉぉぉおアイツ！　いたああ！！」

「ねえ、何で！　私耐えたよね、絶対耐えたよね！！　いたあああい！！」

「いえ、完全に肩をヒクつかせて、笑っていましたよ。なのはさん」

「なあ、変態（ジェイル）ってさ、あの入場曲にあわせて運ばれてきたんだよな。」

『……』

一馬（ユニコーン）以外がそれを完璧に想像してしまった。

当然の結果、

『ブハっ！！』

デデーン♪

『風間、なのは、フェイト、アリシア、はやて、アリサ、すずか、星香、アウトー』

「ユー君んんんんいったあああ！！」バチーン！

「何やってくれとんねんんんんんいたあああああ！！」バチーン！

「おい、テメエぇぇっぇぇえうおおおお！！」バチーン！

「もうぉぉおおお一君んんいやあああああ！！」バチーン！

「なんてもん想像させてくれてんのよぉぉぉぉお！！」バチーン！

「一君んんんん酷いよぉぉおおいたあああああ！！」バチーン！

「一君、絶対に後でいったあああああいいい！！」バチーン！

「もういやあぁぁぁぁぁあああああ！！」バチーン

上から星香、はやて、風間、なのは、アリサ、すずか、アリシア、フェイトの順である。

『校長先生が壇上を降りられるので、皆さん注目してください。』

ウーノさんの校内放送に従って、壇上に注目する。

うん、吊られている変態（ジェイル）。ブリーフの一部分がモッコリしているて、女性方が両手で顔を覆い目を隠している。

ゆっくりロープが移動していく。ジェイルは人形のように揺られていく。

悲劇という名の喜劇は突然訪れる。

ブチンッ！！　グチャ！！　ロープが切れて、顔面から突撃。

「ふふ……しまった！」

「アハハハハ、アイツアホだろ……あっ」

お前の方がアホだろ。

デデーン♪

『一馬（ユニコーン）、風間、アウトー』

「へんたいぃぃぃいいいい！！　うわあああああ！！」

「俺のバカ野郎ぉぉおおおおおお！！　いだあああああ！！！」

ウーノさんが俺達の傍までやって来た。

「それでは、変態（ドクター）は放っておいて行きましょうか。」

「良いんですか？」

「良いんですよ。すずかさん。」

「そうよ、すずか放って置いていいのよ。あんな変態は。」

「そうだよすずか。あんなの見たらバカになるしね。」

アリシアよそれは、結構酷いんじゃないのか。あれでも一応、最高峰の天才なんだぞ……変態だけど。

ピクピクと痙攣している変態（ジェイル）を放って置いて、体育館を出た。

もう、誰か助けて。

とある中学校、校舎内廊下を歩いている。

「皆さん、左手側を見てください。あそこには歴代の校長先生の肖像が飾られています。」

「歴代校長ねぇ……嫌な予感しかしねぇよ。」

一個ずつ見て見る。

初代：今の校長（頭に女性のパンツを穿いています。）と変わらない。

二代目：変わらない。

三代目：変わらない。

四代目：変わらない

五代目：変わらない

「は、お、俺様が、こんな事で笑うわけないだろう。」

「どれも同じじゃん。」

「こ、こんな事で私が、わ、笑うわけ。」

「こ、コレハき、キツイで。」

「わ、私もきついです。」

風間、星香、はやて、アリサはちょっとヤバイが他のメンツは大丈夫そうだ。

六代目：メイド服を着て……

カチューシャをしていて……

黒のニーソを履き……

親指を咥え腰をくねらせて……

真っ赤な瞳で上目使いをしている……レジアス中将

デデーン♪

『なのは、フェイト、はやて、アリシア、風間、一馬（ユニコーン）、アウトー』

「もういやだよぉぉおおおいったあああ！！」バチコーン！！

物凄く良い音がしたなのはの尻。

「今のはんそくやぁぁぁぁあああ！　うあああああ！！！」バチーン！！

「今のアウトっしょぉぉおおお！！　うおおおおおおおお！！！！」バコーン！！

痛い、腿裏に直撃。竹刀はヤバイ！！

「あの人、何やってんのよぉぉおお！　レジアスのオッサンのばかあああああぁぁぁぁぁああ！！」バチーン

アリシアの叫びが、学校中に響いた。

「もう、何かに目覚めそうだよぉぉおおお！！　きもちぃぃぃい！！」バチーン

フェイトぉぉぉおお。それは止めろォォォおお！！　と俺は叫びたかったが、痛みのあまり叫べなかった。

「これ、反則以外の何者でもねえええええ！！　いだあああぁぁぁあ！」バチーン

ああ、まだガキ使の方が優しいだろ。コッチは竹刀だぞ。痛いってレベルじゃねえよ。尻が四つに割れるぞコレ、マジ冗談じゃ無く。

「今のはヤバかったね、アリサちゃん。」

「そうね、すずか。今のはヤバかったわ。私はあれが誰なんか知らないけど、ヤバかったわ。」

「なのはちゃん達は知っているっぽいけど。」

「聞かないであげましょ、また思い出してお仕置きされるのは可愛そうよ。」

「そ、そうだね。」

少し進んで、ウーノさんが止まった。

「あちらを見てください。」

そう言われて、右手側のグランドを見る。

ザフィーラ人間ｖｅｒｓｉｏｎとシグナムさんがジャージを着ていた。あの二人は体育教師役だな……
その二人の前に二人の生徒役が立っていた。

「何故、遅れたんだ。理由を話せ。」

凄みを聞かせるシグナムさん。

「ゴメンナサイ、クロノ君が遅れたのは私のせいなんです。」

女子生徒役のシャマルさんが頭を下げている。その横では男子生徒役のクロノこと、ＫＹが居る。

「ほう、それは一体どういう事なんだ。言ってみろ。」

「前の授業の調理実習で、私が作った料理を食べたクロノ君が倒れてしまって。」

ああ～それは仕方ないな。あの殺人兵器を食べて、倒れるのは仕方がないよ。

「ほう、そういう事か。シャマル、行ってよし。クロノは残れ」

「はい。」

「え?！」

ですよね～クロノの反応は正しい。

「それで何で遅れた。」

「だから、シャマルの料理をたｂ」

全部を話す前にシグナムさんの平手打ちが、クロノ頬に直撃。突然平手打ちを貰った、クロノは訳が分からないといった表情でシグナムを凝視した。

「なんで遅れた。」

「だから、シャマルの」

バチーン！　と強烈な一発ビンタ。

「何故、遅れた。」

「だから、シャｍ」

バチーン！　もう一発。

「何故、遅れたんだ。」

「だから、」

バチーン！　もう一発。

「何故遅れたんだ？」

「だｋ」

バチーン！　もう一発。もう止めてクロノのライフはゼロよ！！

「そういう性根の腐った生徒は、レヴァンティンの錆びにしてくれる。」

シグナムさんは、突然レヴァンティンセットアップさせてカートリッジを全部ロードした。シグナムさんがメチャクチャ鬼畜なんですけど。鬼見えるんですけどぉぉぉおお！！

「何故、僕はこんな役なんだあぁぁぁぁぁあ！！！！！！」

「紫電一閃！！」

「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！」

クロノの断末魔が響いた。

デデーン♪

『全員アウトー』

バチーン！！！！！

『いだあああああ！！』

『いたあああああいいいいいいい！！！』

誰もがクロノの事が、可哀想に思い。文句を一切言わずに尻をシバかれた。

「それにしても、尻が痛いな。尻が割れそうだ。」

「ぶふ！　あ？！」

「ふふ。ああ？！」

『アリサ、すずか、アウトー』

「いやぁぁぁぁああ！！！」バチーン！！

「一君のばかあああぁぁあああ！！」バチーン！！

「一君、今のは酷いの。」

「今の笑う必要あるか……あ、そうか元々尻は四つに割れていたか。スマンスマン。」

デデーン♪

『なのは、はやて、風間、アリシア、アウトー』

「笑い過ぎて笑いの沸点下がっているんだからねえええええ!!」バチーン!!

「ホンマやぁぁぁああ!!」バチーン!!

「何で、私がとばっちり喰らってんのよォォォオオオ!!」バチーン!!

「何で、俺は笑ったんだよぉぉおおお!!　てめえええぇぇぇえええ!!」バチーン!!

「ゴメン、ワザとやったんだ。オ・レ・」

黒い笑みを浮かべる一馬（ユニコーン）に戦慄する他のメンバー。

「皆さん、そんなペース配分で大丈夫ですか?」

『大丈夫じゃないです！！！！！！！！！』

コレハ、俺の独壇場になりそうだな。

異常に黒い一馬（ユニコーン）でした。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時２（後書き）

次回その３

間に合えば明日か明後日に更新します。

正月スペシャルは学校が始まる前に終わらしたいです。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時３（前書き）

更新です。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時３

とある中学校のとある保健室。

「ここが、保健室です。」

俺らはウーノさんに保健室に連れて来られた。保健室内を見回したが、コレといった怪しいものは見られなかったが、なぜか保健室の先生が居ない。

全くもって、嫌な予感しかしない。

「今、先生は。」

ウーノさんが何かを言おうとしたその瞬間。

「先生、先生はいらっしゃいますか！！」

突然、保健室のドアが開かれて二人の女子生徒が現れた。

「ぶは！！」

デデーン♪

『はやて、アウトー』

「もういややぁぁぁあああ！！　尻がはれてまうぅぅぅう。」

バチーン！！

はやて以外のメンツはポカーンっとしていた。

「おー、オーリスさん。何してはるんですか？」

涙目ながらはやては、口から滝のように血を流しているオーリスに話しかけた。

「ちょっと、何話しかけてるのよ。この子の状態をちゃんと見て言ってちょうだい！！！！！」

ドゥーエさんあんたも何やってんですか？！

するとい、突然。

「オーリスゥゥゥウウウ！！！」

天井からカチューシャとメイドと黒のハイニーソを装備したレジアス中将が出現した。

しかも、オッサンのガーターベルトがモロに全員見てしまった。

俺も合わせて皆さんはギリギリ耐えましたよ。太腿を思いっきり抓

ってね。

「あ、ああ良いかも。この痛み。」

『え?!』

フェイトの爆弾発言があったものの、レジアスの出現には何とか耐えた。

「ドゥーエ、オーリスを直ぐにベッドに寝かせなさい。」

「はい。」

迅速な行動する。お?!　恰好はあれだが、何とかなるか?　そう思った俺を殴り飛ばしたとこの後、すぐに思った。

何を血迷ったか、レジアスがオーリスの上に馬乗りになった。

オーリスの胸に手を当てて、

「1!　2!　3!」

心臓マッサージを始めた。

「オーリスゥゥゥウウ!!」

顔面を近づけて叫び散らした。

そして、チラつくガーターベルト。

『ぶは！！』

デデーン♪

『全員アウトー』

「何やってんだあの変態親父はぁぁぁあ！」バチーン！！

「あああん！！　良い。コレ気持ち良い」バチーン！！

フェイトぉぉおお！！　Mに目覚めるな！！

「フェイトちゃんが壊れたなの……いったああい！！」バチーン！！

「いきなり出てくるのは反則やぁぁぁあ！！」バチーン！！

「気持ち悪いもんみせないでよぉぉおお！！」バチーン！！

「オーリスさんが可哀想だよおぉぉおお！！」バチーン！！

「親として今のはどうなんだぁぁぁぁあ！！」バチーン！！

「ガーターベルトは卑怯でしょぉぉぉおお！！」バチーン！！

「誰か、あの格好にツッコみなさいよぉぉおお！！」バチーン！！

「さあ、ここはレジアス先生に任せて、私たちは先に進みましょう。」

『是非、そうしてください。あれは反則です。』

早足で保健室から出た。

「ウオオォォオオオリィィィイイイスゥゥゥゥウウウウウ！！！！！！！！！！！！！！！」

すげえ声だな。窓が揺れている。

「はやて、あれは卑怯気だよな。しかも、生っていうのが」

「そうやな。あれは卑怯、反則の域を超えてエグイが一番いいんちゃうか？」

「それもそうだな、アハハハハ……あっ！　素で笑ってしまった。」

デデーン♪

『一馬（ユニコーン）、アウトー』

「オレ、バカだぁぁぁああ！！」バチーン！！

とある中学校のとある教室

「さて、この教室が今日一日、アナタ達が授業を受ける教室です。今から１０分間の休憩です。それでは、休憩時間が終わり先生が来るまで大人しくしていてくださいね。」

ウーノさんが教室から出て行き、笑い通しだった９人に束の間の休息が訪れた。

「やっと、休めるぅ～」

俺は机に両手を枕代わりにしてうつ伏せになった。ああ～眠くなってきた。

キンコンカンコンっと突然放送が始まった。

『言うのを忘れていましたが、居眠りをすると尻がシバかれますよ。』

背筋が寒くなった俺は、直ぐに姿勢を正した。

「マジかよ～居眠り出来ないのか……もう嫌。」

「ああ～２４時間耐えれる気が全くしねえな。」

「ホンマにきつ過ぎるで。」

「お尻が爆発しそうなの。」

「ぶふ！　あ！」

「ふふ……あ？！」

デデーン♪

『フェイト、アリサ、アウトー』

「なのはぁぁぁぁあ！　何言ってんのォォオおお！！」バチーン！！

「何、一君みたいな事いってんのぉぉおおおお！！」バチーン！！

「ごめんなさぁぁぁああい！！」

「尻が痛いよ～」

お尻をさする二人に、不覚にもムラムラしてしまった。まあ、風間の奴は息子が反応していたな。

「お、も、もう少しでとれそうだ。」

クソナルシが机の中に手を突っ込んでいる。嫌な予感がしまくるんだが、俺の気のせいか……いや、気のせいじゃないな。

「おし、と、れ……た……」

「ボタン？　……コレボタンだよな。」

風間の机の中からボタンが出てきた。そう、ボタンだ。何かを止める様なボタンだ。

俺は途轍もなく嫌な予感がする。それは、誰もが感じとっていた。これを押したらロクな事にならない。

ポチッ！！　そんな空気の中に一人の勇者が居た。

「ユー君、何やっているんですかぁぁぁぁあ！！」

「いや～そこにボタンがあったから。」

「何、そこに山があったからみたいな言い方してるんですかぁぁあああ！！」

ウィーンという音を立てて、教室に設置されてあった時計が半分に開き、中から全員分の名前が書かれたルーレットがあった。

それが作動してしまった。

戦慄するなのは達、俺と風間はヤッパリといった顔をしていた。

教室内の緊張感が高まる。

誰もが自分に止まるなと願い、下を向く。誰もがルーレットを見たくなかった。
自分が当たるにしろ、当たらないにしろ。見るのが嫌だった。

デデーン♪

『風間、タイキックー』

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」

「おい、タイキックとかマジでふざけんなよ!!」

机をバンッと叩いた瞬間、教室のドアが開かれ、ザフィーラがボクサーパンツを穿いて教室内に入ってきた。
気合は十分そうだ。

「シッ！　シッシ!!」

蹴りの具合を確かめている。一言言いたい、メッチャ痛そう。

「いやいや、待って待って待って！！　何で俺なの！！　無理無理無理！！　無理だってえぇえええ！！」

「大人しくしろ。」

「そんな殺生な？！　無理ですって、てか何でオレなんですか？！　そんなの酷いっしょ！！」

「何を言っているんだ？　お前が当たったからだ。」

「そんなの酷過ぎ『黙れぇえぇえぇえぇえぇえ！！』ええちょっと！？」

そんな風間に対して、更に追い打ちが降りかかった。

『大人しく罰を受けないと。タイキックからマッスルスパークに変更になりますよ。』

「……」

風間の顔が、大変な事になった。悲壮感が漂う。

完全に諦めた風間は、自ら尻を突きだした。

「良い覚悟だ。」

ザフィーラはしっかり息を吸い、吐いた。

「せいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

バゴーーン！！！！！！！！　風間の体が宙に浮いた。

「いつあいあうたうあいあいういあおいしあお！！！！」

何を言っているのか全く分からないが、とても痛かったのは分った。

こうして、１０分間の休憩が終わった。シンドイ、滅茶苦茶シンドイよ。まだ1時間目の授業は始まっていないんだよね。

ああ、ヤバイかも。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時３（後書き）

次回の更新は少し遅くなるかも。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時４（前書き）

更新です。

嬉しい事に、小説ランキングで、日間、週間、月間の三つでベスト１００位以内に入っていました。凄く嬉しかったです！！

私の小説を読んでくださった方、評価をくださった方、本当にありがとうございます。これからも頑張っていきますので、よろしくお願いします。

ヤバス、このままだと正月スペシャルが１０部超えそうな気がしてきた。マジでどうしよう。

最後までやりますが、本編に入るのが相当後になりそうな気がしてきた。

休憩時間が終わった。可哀想な事になっている風間は、机でグデっていて動く気配が全くしない。

あれは、流石に同情するわ。

「はーい、皆さーん。今から一時間目の授業を始めますね。」

ガラガラっと教室のドアが開かれ、一人の女性が入ってくる。

「お姉ちゃん!?」

「お義姉さん?!」

なのはとすずかが同時に叫んだ。そう、月村忍さんがやって来た。

「さて、私が今日の一時間目の授業を担当する月村忍です。」

「とは、言っても皆さんには自己紹介をしてもらいますね。」

「自己紹介かよ、嫌だな。」

愚痴る俺。

「一君。そんなに嫌がらないで、それに自己紹介って言っても。名前と趣味ぐらいで良いですよ。それに対して私が評価しますから。」

「いりませんよ。忍さん。」

「嫌な予感しかしないなの。」

項垂れるメンツ。

「え～と？　それでは、そこに居るM女から。」

「はい。分かりました。」

『？！』

元気いっぱいのフェイトの反応にフェイト以外のメンバーが驚愕し、吹きかけた。

もう、フェイトは手遅れだった。

「私はフェイト＝テスタロッサです。趣味はシバかれる事です。」

「まあ、シバかれる事が趣味だなんて、アナタは『Mト』って呼びますね。」

「はい。私はMトです！！」

『ぶっふー！！』

デデーン♪

『なのは、アリシア、はやて、アリサ、アウトー』

「フェイトちゃんが壊れたなのぉぉおおお！！」バチーン！！

「フェイトぉぉおお。姉はそんなのゆるしませぇぇえええん！！」バチーン！！

「フェイトちゃん、戻って来てなぁぁあああ！！」バチーン！！

「もう、フェイトをどうにかしなさいよぉぉおおお！！」バチーン！！

そんな感じで自己紹介が進んでいった。

残るは俺と風間だけになった。それまでの間に色々と評価や何時の間にか追加されていた項目のあだ名がつけられていった。

まずははやては『狸』誰もが頷く。

アリサは『バーニング』と言われた。俺はそれについつい笑ってしまって、尻をシバかれた。

すずかは『猫』と名づけられた。

アリシアは『アホ犬』また、俺が考えたあだ名だった。これには全

員が頷く。

なのはは『にゃのは』だった。俺は『魔王』じゃない事に、悔やんだ……ウソデスヨ。ハイ。

星香は『ウサギ』と名付けられた。

意外と、普通なあだ名をつけてきた為、笑は俺の一回しかないが、ここからは分らない。だって残っているのは俺とコイツだけだ。何があるか分らない。

まずは、俺からだ。

「え～っと……名前は来栖一馬（ユニコーン）です。趣味は居眠りです。」

「まあ、まあまあまあ！！　一馬（ユニコーン）！！！！！！」

デデーン！！　風間（ユニコーン）って何だぁ～

『ぐふ！！！』

デデーン♪

『一馬（ユニコーン）、風間、はやて、アウトー』

俺と風間はやては吹いた。だって……

「ブロリーは卑怯でしょうぉぉぉおお！！」バチーン！！

「何でブロリーのデデーン！！　なんだぁぁぁあああ！！」バチーン！！

「ブロリーはいかんでぇぇぇえええ！！」バチーン！！

この世界にも、俺が転生する前にあったアニメは全部ありましたよ『リリカルなのは』以外ならね。

だから、この世界でも『あべし』とか『人がごみのようだ』とか『かめはめ波』とか通じますよ。マジで……

「ねえ、一君。」

「うん？　どうした。」

尻をさすっている俺に、質問をぶつけてくるなのは。

「ブロリーって誰？」

「ドラゴンボール知っているか？」

「当然だよ。私ファンだよ。魔人ブウ編魔まで全部見たんだからね。」

そんなに胸を張られて言われると、視線がそっちに移ってしまいそうなんだがね。

「ま、まさか。ドラゴンボールのキャラクター？」

「そのまさかだよ。しかも、映画に出てきたよ。」

「映画か～私は映画の方は見た事無いんだよね。」

「お勧めだよ。初めてブロリーが出る映画は特に。」

「分った。今度フ○バで借りて見てみるね。」

「その必要は無いよ。」

「ふぇ？」

グハ！！　首を傾げてコチラを見ないでくれ、純粋な瞳が俺を打ち抜く！！

「ハア……ハア……ハア、スゥゥゥゥハァァァアア」

シッカリ深呼吸をした。

「映画とＧＴ編のＤＶＤ全部俺ん家にあるから、今度貸そうか？」

「本当？！」

「あ、ああ。」

何か鬼気迫る感じのなのはさんに、気圧されてしまった。

「一君。ありがとう！！！」

なのはに手を握られて、上下にぶんぶんされた。俺の頬を緩みっぱなし何だが、恐ろしい視線が四つほど感じられたが無視をした。気にしたら負けだ。

「次に行きましょうね。」

休ませる気、無いですよね忍さん。

「やっと、俺の出番か！！」

意気揚々に立ち上がる。

「あらまあ？！　あなたの名前は『やっと、俺の出番か！！』さんですか。凄い名前ですね。」

『ぶふ！！！！！』

デデーン♪

『一馬（ユニコーン）、星香、なのは、フェイト、はやて、アリシア、すずか、アリサ、アウトー』

「もう、もう名前ですらねぇぇぇえええ！！」バチーン！！

「良い気味ですぅぅぅぅぅう！！」バチーン！！

「痛いのいやぁぁぁぁああ！！」バチーン！！

「もっと、もっと強くぅぅぅぅぅぅ！！」バチーン！！

「うち二連続ぅぅぅぅぅう！！」バチーン！！

「フェイトがもう手遅れぇぇぇぇえ！！」バチーン！！

「お姉ちゃんのバカぁぁぁぁぁあ！！」バチーン！！

「忍さん何やってんですかぁぁぁぁあ！！」バチーン！！

かくして自己紹介は終わった。

キーンコーンカーンコーンっと終わりのチャイムが鳴った。もうそんなに時間が経ったのか……時計を見ると、まだ３０分ぐらいしか経ってない……嫌な予感がしまくる。

「皆さーん。１時間目の授業はこれで終わりますね。」

お、良かった。初めて俺の嫌な予感が外れた。

「きりーつ。」

「礼。」

『ありがとうございました。』

忍さんが教室から出て行く。

「ホンマに何も無くてよかったな。」

「ああ、そうだな。終わるのが速かったから、何かあるものだと思ったんだけど、何も無かったよな。」

「無かったで、ホンマに助かったわ。」

バーン!!　突然教室のドアが力強く開けられた。

「ガァッデム!!!!!!!」

真っ暗なサングラスをしたザフィーラさんが、若本さん似の声を出して出てきた。

あ～あ、風間の顔が大変な事になってるよ。

正月スペシャル　笑ってはいけない２４時４（後書き）

次回は風間がガァッデムされます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3482z/

魔法少女リリカルなのは〜運に見放された転生者〜

2012年1月4日02時53分発行